宇久町文化財調査報告書　第３集

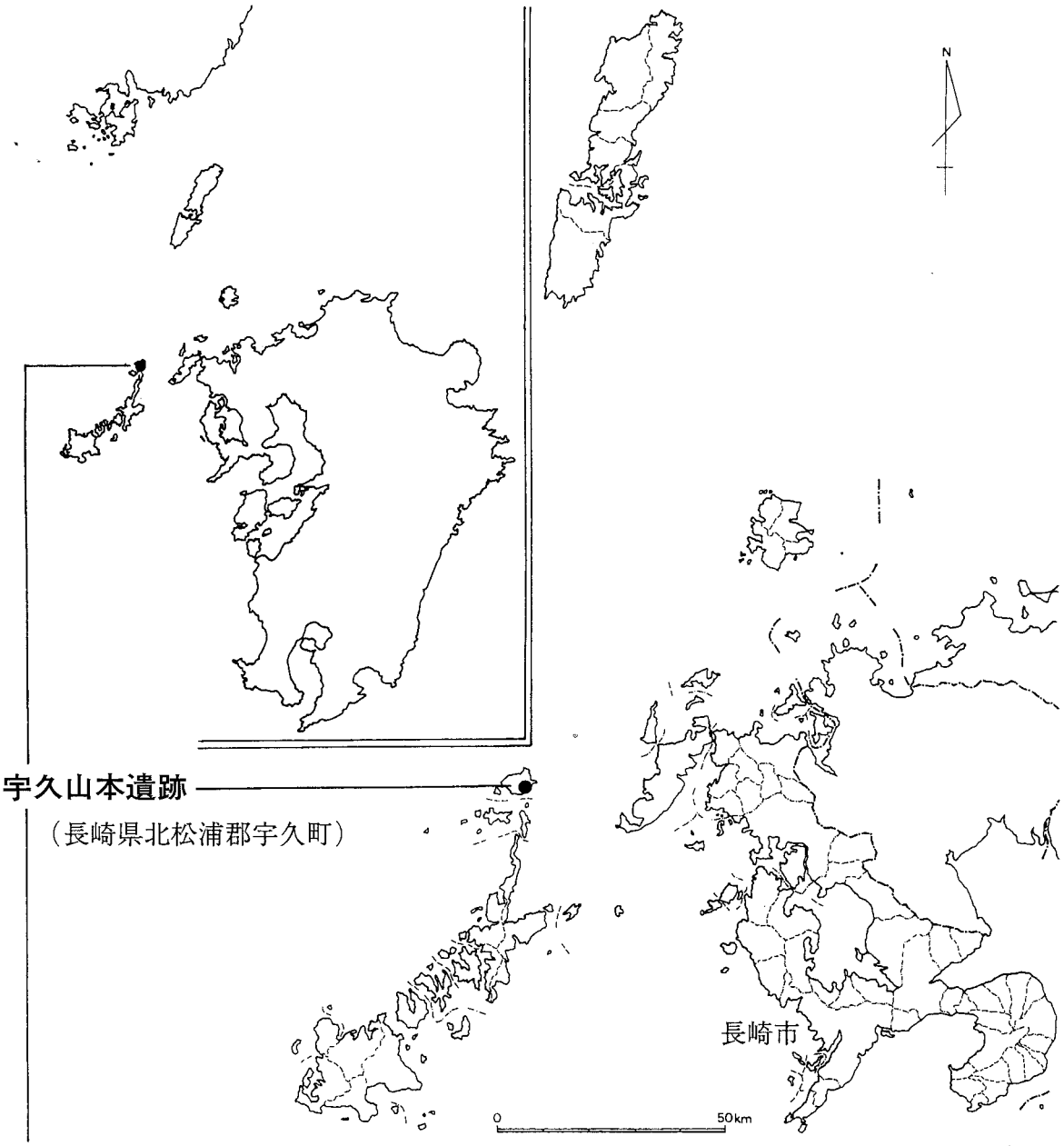
宇久山本遺跡

1997

長崎県宇久町教育委員会

宇久町文化財調査報告書　第３集

宇久山本遺跡



発刊にあたって

本書は，保健センター建設に伴い，宇久町教育委員会が長崎県教育庁文化課の協力を得て実施した宇久山本遺跡発掘調査の報告書です。

宇久山本遺跡のある，宇久町の中心地である平郷北側の丘陵部は，古くから石鏃・石斧などの石器や弥生土器などが採集されることで知られていましたが，これまで発掘調査は行われたことはありませんでした。

今回，保健センターの建設が計画され，福祉センターの隣接地であるこの地がどうしても都合がいいということで，関係機関での協議の結果，調査が実施されることとなったわけです。

今回の発掘調査は，調査日数も短く困難な面もありましたが，旧石器時代から中世に至る様々な遺物が出土し，宇久町の歴史を明らかにするための資料を増やすことができました。

最後に，この報告書が文化財に対する理解と愛護を深める一助となり，学術研究の資料として役立つことを念じて発刊のあいさつとさせていただきます。

平成９年３月

宇久町教育委員会

教育長　　中　野　弥　平

例　　言

1．本書は，平成７年度に実施した長崎県北松浦郡宇久町平郷字山本1906番地１に所在する宇久山本遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は，保健センター建設に伴い，平成７年12月11日～12月21日の期間で実施した。

3．調査は，宇久町教育委員会が主体となり，長崎県教育庁文化課が担当した。

4．調査の関係者は次の通りである。

宇久町教育委員会	教育長	中　野　弥　平
	教育次長	濱　田　純　二（現　総務課長）
	社会教育係長	中　村　幸　雄（現　商工観光課課長補佐）
	社会教育係	泊　　吉　弘
長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	甲斐田　　彰
	文化財調査員	松　尾　昭　子

5．本書は川道寛，古門雅高，甲斐田彰が分担執筆し，各項の執筆者は本文目次に記した。

6．本書関係の写真撮影は，調査中のものは松尾が担当し，遺物については古門が担当した。

7．本書関係の出土遺物と図面および写真は，長崎県教育庁文化課立山分室に保管している。

8．本書の編集は甲斐田による。

本　文　目　次

Ⅰ　地理的歴史的環境……1（甲斐田）
1．地理的環境……1
2．歴史的環境……4

Ⅱ　調査に至る経緯……8（甲斐田）

Ⅲ　調　　査……9（甲斐田）
1．調査の概要……9
2．土　層……10
3．遺　構……10

Ⅳ　遺　　物……12
1．石　器……12（川　道）
(1)　旧石器時代の石器……12
(2)　縄文時代晩期の石器……12
(3)　小　結……17
2．土器・陶磁器……18（古　門）
(1)　縄文土器……18
(2)　貿易陶磁……18
(3)　国産土器……21
(4)　土製品……24
(5)　滑石製品……24
(6)　銭　貨……24
(7)　貿易陶磁・国産土器の出土量……24
(8)　土器・石製品小結……24

挿　図　目　次

第１図　宇久町地形分類図〔1：62,500〕 …… 1
第２図　宇久町表層地質図〔1：62,500〕 …… 2
第３図　宇久山本遺跡周辺図〔1：12,500〕 …… 3
第４図　宇久町遺跡分布図〔1：62,500〕 …… 4
第５図　調査区周辺図〔1：2,500〕 …… 8
第６図　調査区図〔1：750〕 …… 8
第７図　調査地点土層模式図 …… 8
第８図　土層断面図〔S =1/75〕 …… 9
第９図　柱穴遺構復元図〔S =1/40〕 …… 10
第10図　柱穴遺構実測図〔S =1/75〕 …… 11
第11図　石器実測図１〔S =2/3〕 …… 13
第12図　石器実測図②〔S =2/3〕 …… 14
第13図　石器実測図③〔S =2/3〕 …… 15
第14図　貿易陶磁実測図①〔S =1/3〕 …… 19
第15図　貿易陶磁実測図②〔S =1/3〕 …… 21
第16図　国産土器実測図〔S =1/3〕 …… 23
第17図　縄文土器・石製品・銭貨実測図〔S =1/3,1/2,1/1〕 …… 25
第18図　宇久松原遺跡出土遺物実測図〔S =1/6〕 …… 26

表　目　次

第１表　宇久町遺跡一覧表 …… 5
第２表　宇久町遺跡立地表 …… 6
第３表　縄文時代晩期の石器組成表 …… 15
第４表　宇久山本遺跡出土石器一覧表 …… 16
第５表　土器・陶磁器組成グラフ …… 25

図　版　目　次

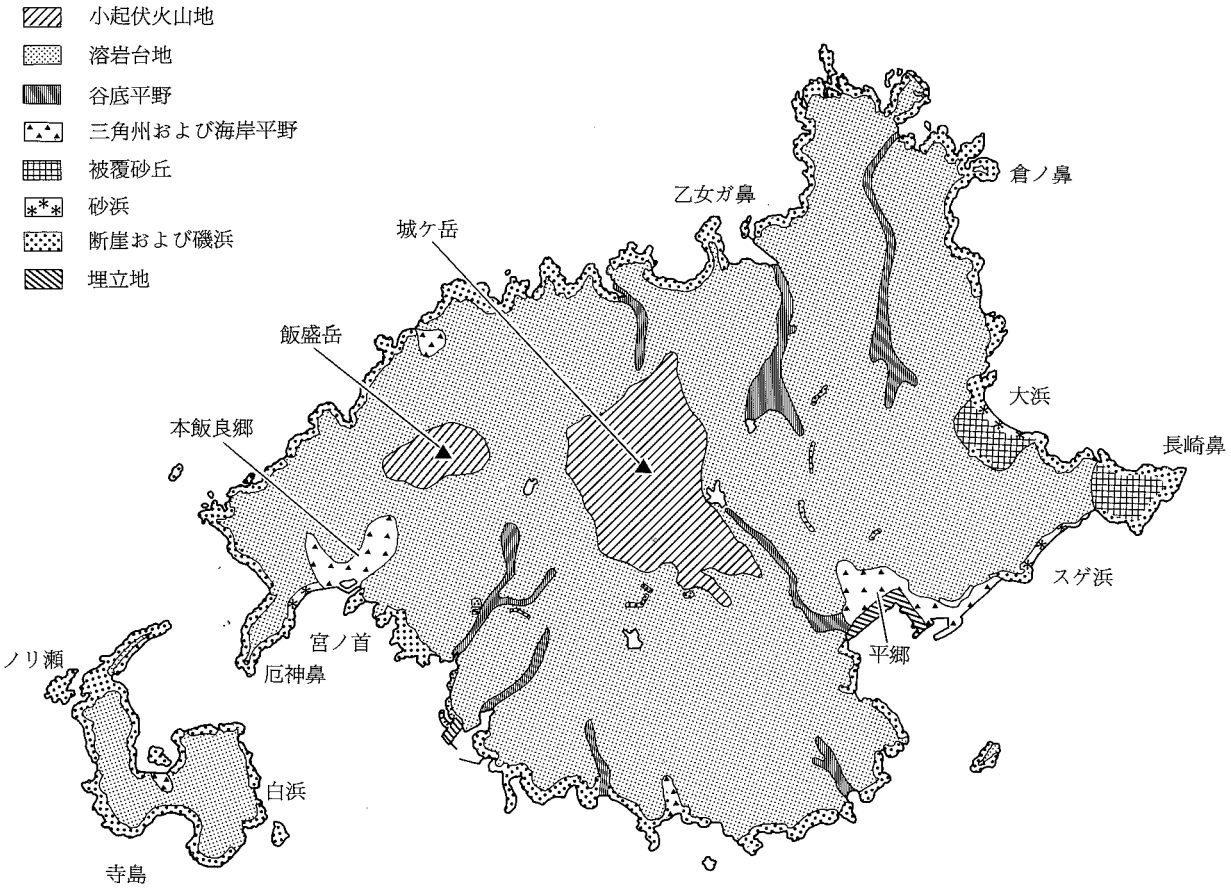
図版１　遺跡遠景・調査区状況 …… 29
図版２　遺物出土状況 …… 30
図版３　宇久山本遺跡出土遺物① …… 31
図版４　宇久山本遺跡出土遺物② …… 32
図版５　宇久山本遺跡出土遺物③ …… 33
図版６　宇久山本遺跡出土遺物④ …… 34
図版７　宇久山本遺跡出土遺物⑤ …… 35

Ⅰ　地理的歴史的環境

1．地理的環境

宇久町は，長崎県の西部，五島列島の北方に位置し（註１），東経129°3′30″～129°9′30″，北緯33°14′00″～33°18′00″の範囲にある。東は約25kmの志々伎灘を隔てて平戸に対峙し，南は小値賀に近接し，北は90kmの彼方に対馬をのぞみ，西は遥か黄海を越えると中国大陸に至る。町域は宇久島・寺島と３島の無人島からなり，東西約９km，南北約６.5km，面積26.37km²（Ｈ７.10.１）である。人口は世帯数1,819世帯（Ｈ８.10.１），総数4,306人（Ｈ８.10.１）で減少傾向にあり，人口密度は166.1人／km²で県全体の377.7人／km²と比べると半分以下である。

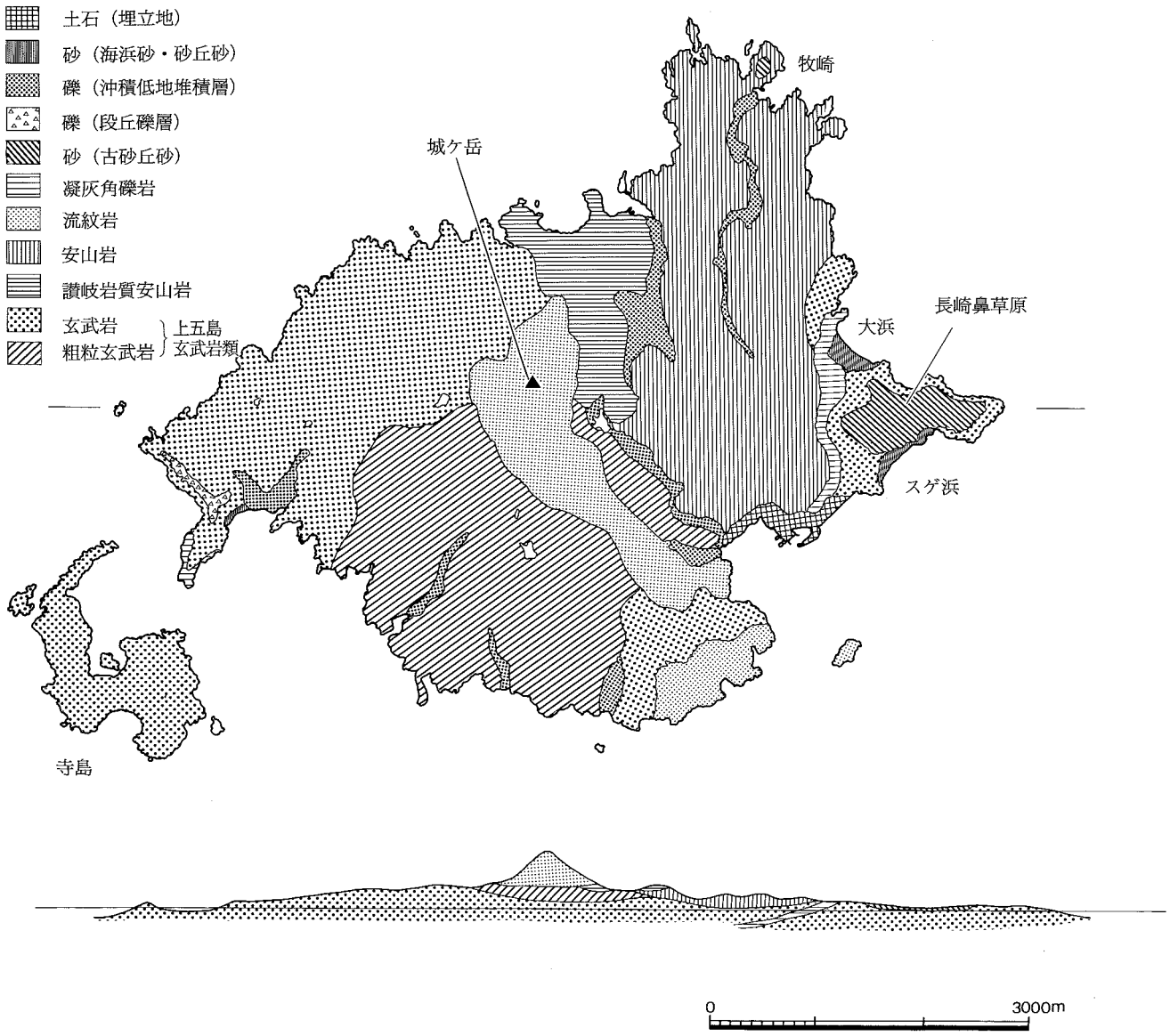
地勢は，宇久島の中央部に小起伏火山地の高まりがあり，その周囲には溶岩台地が四方に緩やかなスロープをもって広がり海岸部に至るが，海岸線はほとんどが断崖か磯浜となっている。中央部の小起伏火山地には最高峰の城ヶ岳（258.6m）とその西方の飯盛岳〈菜盛岳〉（163.7m）がある。城ヶ岳は宇久島で最も新しい火山活動（註２）によってできた火山で，五島列島ではめずらしい鐘状火山〈トロイデ〉であり島内一の景勝地である。宇久島の穏やかな地形的特徴を形づくっているのが，島内全域に広がる溶岩台地である。城ヶ岳の山裾，標高100mほどのところから海岸線へ向かって緩やかに低下し，河川や峡谷で切られる以外は連続的だがやや起伏は大きく，城ヶ岳の南側と南部を除く海岸付



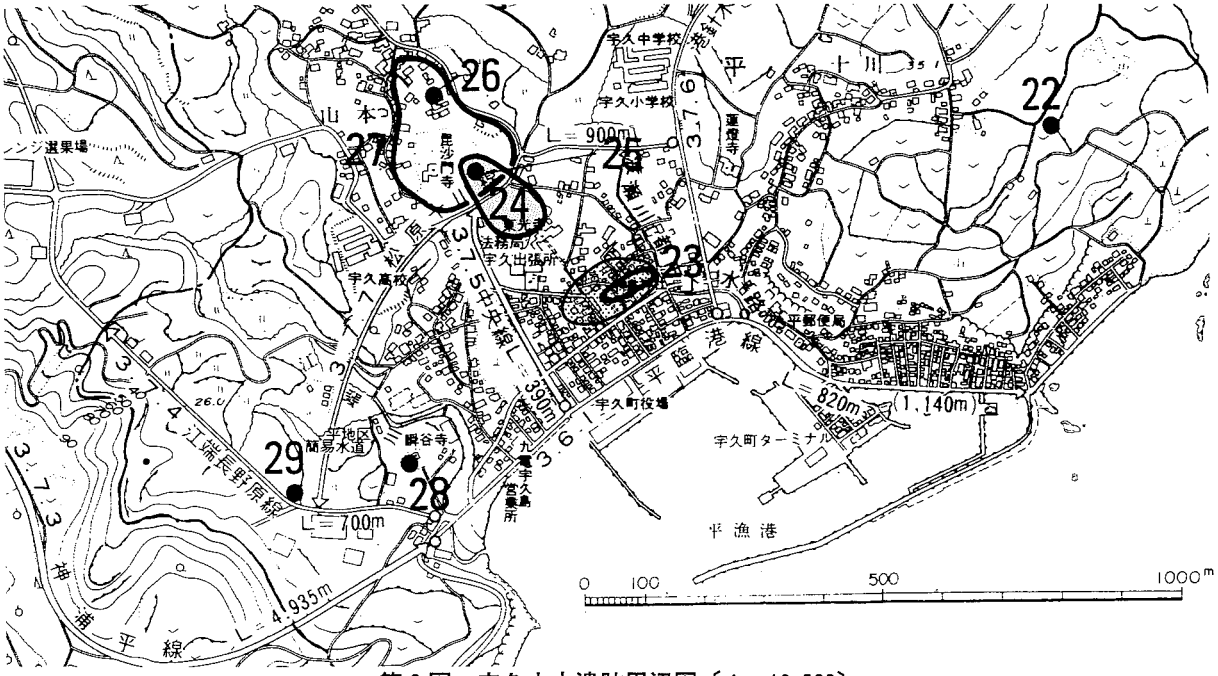
第１図　宇久町地形分類図〔１：62,500〕

近には草原が広がっており古くから放牧が行われている。草原以外は開墾が進められ畑地として利用されているところが多い。島内に平野はほとんど発達しておらず，平郷と本飯良郷の若干の海岸低地を除くと，河川沿いに谷底低地がみられるぐらいである。海岸低地の沿岸部は干拓及び埋立が進み集落が形成されている。また，その周辺と谷底低地では小規模な稲作が行われている。海岸線は一般に変化に富み東部に長崎鼻，西部に厄神鼻，北部に倉ノ鼻・乙女ガ鼻などが突出し，断崖が美しく連なり北海岸は西海国立公園に指定されている。砂浜海岸は長崎鼻の付け根の大浜・スゲ浜と厄神鼻の付け根の宮ノ首海岸ぐらいしかないが，海水の透明度は高く白砂が美しい。寺島は中央部に狭小な海岸低地がある以外は全域が溶岩台地で，最高地点でも38mしかない。海岸線は宇久島と同じく屈曲が激しく，東部の白浜を除くと断崖や磯浜となっている。また，島の北西のノリ瀬北岸には波食作用によって生じた，県指定天然記念物の寺島玉石甌穴がある。

地質的にみると，島の基底をなすのは上五島玄武岩類である。この玄武岩は，宇久島・小値賀島と



第2図　宇久町表層地質図〔1：62,500〕



第３図　宇久山本遺跡周辺図〔１：12,500〕

その周辺の小島群に広く溶岩流として分布し，おもに宇久島西部及び寺島の表層地質となっている。流紋岩は流動性に富むため，なだらかな楯状台地を形成し宇久島の景観の母体となっている。宇久島東部ではその上部に安山岩及び讃岐石質安山岩がのっている。これらは，城ヶ岳よりやや東側を起源とする溶岩である。宇久島中央部から南東にかけては城ヶ岳流紋岩に覆われている。これは，宇久島最後の火山活動となった城ヶ岳の噴火に伴う溶岩である。流紋岩は粘性に富むため，標高は低いが突出した部分を持つ城ヶ岳の景観を作り出している。宇久島の東端部の表層は砂となっている。長崎鼻草原では，玄武岩の溶岩流を覆って，厚い古砂丘（註３）砂の砂層が分布する。同様な砂層は牧崎にもみられ安山岩を覆って分布している。新しい砂層は大浜やスゲ浜でみられる。浜砂は貝殻に富む白砂で，陸側に砂丘が発達している。五島列島北部は沈水性の海岸地形のため沖積平野は発達しておらず，本町でも沖積低地堆積層は河川や峡谷沿いにみられる程度である。

気候は，対馬暖流の影響をうけ，夏は涼しく冬は暖かい海洋性気候である。周囲が海であるため湿度は高いが，降水量は比較的少なく晴天の日が多い。同上の理由で年間を通して季節風の影響を大きく受けるが，五島列島の北に位置するため台風による暴風は少なく直撃することはほとんどない。

産業は，第１次産業の占める割合が大きく，就業者の33.5％を占め県平均の11.0％を大きく上回っている。特に農業が中心で，就業者の31.3％を占め，耕地率は県全体の13.8％に対して26.3％（Ｈ８．８．１），総人口に占める農家人口の割合は県平均の13.6％に対して32.9％（Ｈ７．２．１），人口１人当たりの農業生産額は県全体では10万２千円に対して14万５千円（Ｈ７）となっている。また，周囲が海であるため水産業も盛んではあるが，経営体が小規模なため漁獲量は多くない。

宇久山本遺跡は宇久島の南東部に所在する。安山岩溶岩台地の南端部にあたり，周辺は南西に緩やかに傾斜している。宇久町の中心地，平郷の北山手に位置し，北西に城ヶ岳をのぞむ。付近には久保様遺跡（**25**），山本五輪塔群（**26**），宇久城跡（**27**）といった遺跡が集中し，宇久松原遺跡（**23**）からも200mしか離れていない。この地域は，畑地として利用されていたが，近年宅地化が進んでいる。海岸線からの距離は400m，標高は15～20mを測る。

2．歴史的環境

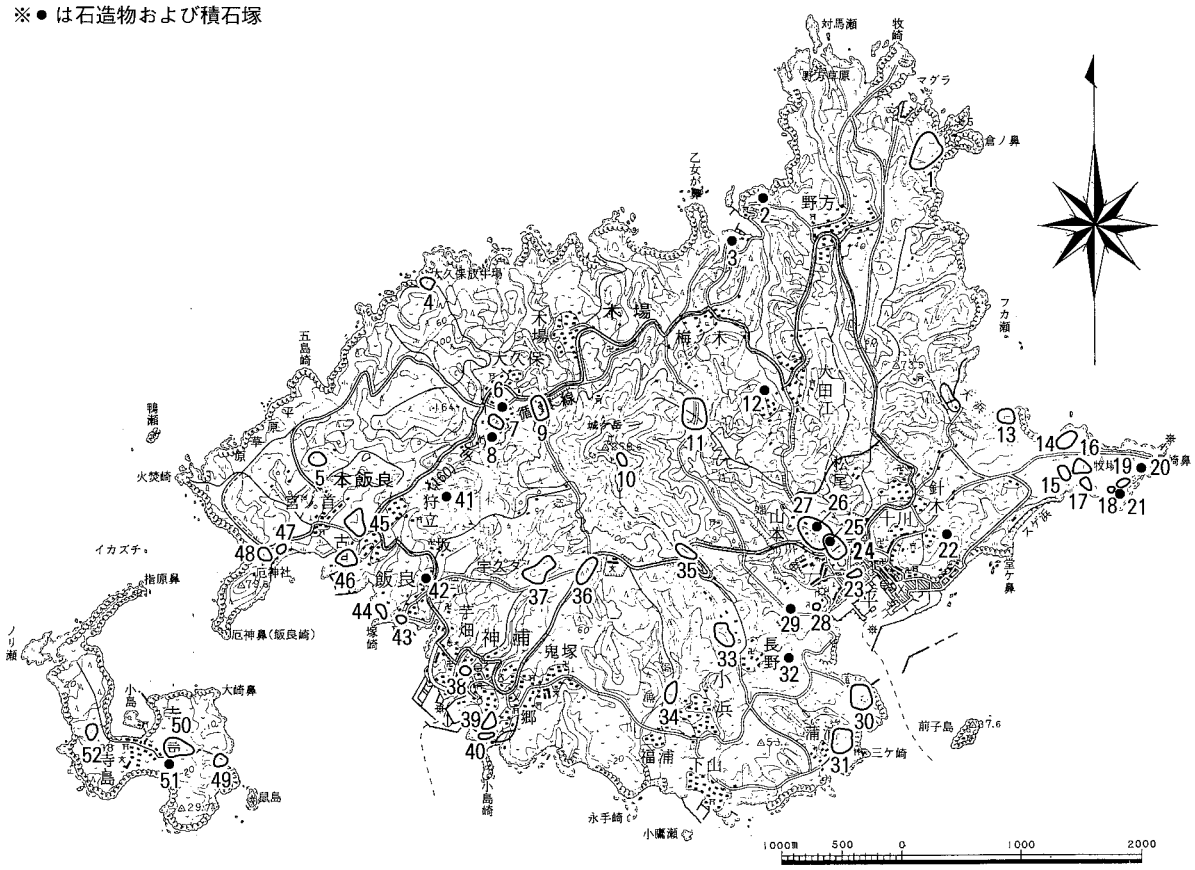
宇久町内にある周知の遺跡の数は52遺跡（Ｈ９．３．31）である。時代別では旧石器15，縄文25，弥生６，古墳10，古代１，中世15，近世４（延べ数）となっている。各時代に即した遺跡の紹介は（本田1996）に詳しいため，立地に即した遺跡の分布状況についてみていきたい。

本町内の立地別内訳は，山地（小起伏火山地）１，台地（溶岩台地）36，低地（谷底低地および海岸低地）４，砂丘（被覆砂丘および砂浜）11，となっている。

山地の遺跡は，城ヶ岳城跡（１）のみである。同城は宇久氏の出城であるが，町最高峰の城ヶ岳のほぼ山頂部に位置することで島内支配の象徴としての役割，海上の状況を把握する役割，戦闘時の砦としての役割を兼ね備えている。他に遺跡がないのは，城ヶ岳は標高が低いとはいえ鐘状火山であるため傾斜は急であり，遺跡の立地には適していないことが原因であろう。

台地に立地する遺跡は36遺跡と最も多い。そこで，まず標高50m以上の上位溶岩台地と50m未満の低位溶岩台地に分類した。さらに本町は地形的特徴のため溶岩台地が海岸部までおよんでいる箇所が多い。そこで海岸線からの距離が200m以上の内陸部低位溶岩台地と200m未満の臨海部低位溶岩台地に分類することとした。高位溶岩台地には，11遺跡が該当する。時代による内訳は旧石器・縄文時代の遺跡が６遺跡，中近世の遺跡が４遺跡，不明（註４）が１遺跡である。旧石器・縄文時代は城ヶ岳を中心に700m～1,700mの圏内にバランスよく分布しており，いずれも遺物包含地である。城ヶ岳平

※● は石造物および積石塚



第４図　宇久町遺跡分布図〔１：62,500〕

番号	遺跡名	遺跡所在地	種別	立地	標高(m)	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	出土遺物・文献等
1	倉ノ首遺跡	平郷字倉ノ首	遺物包含地	台地	35	○	○						ナイフ形石器・細石核・細石刃、石鏃　＜文献①＞
2	野方積石塚	野方郷字黒原	積石塚	台地	45								
3	三浦遺跡	木場郷字三浦	石造物	台地	23						○		石塁
4	餅ノ木遺跡	大久保郷字餅ノ木	遺物包含地	台地	30	○							尖頭器・細石刃・掻器
5	藤田遺跡	本飯良郷字藤田	遺物包含地	台地	40	○	○	○			○		三稜尖頭器、石鏃・片刃磨製石斧・凹石、青磁・石鍋
6	垣深板碑群	大久保郷字垣深	石造物	台地	100						○	○	板碑
7	祥雲寺跡	大久保郷字垣深	寺跡	台地	110							○	
8	大久保様遺跡	大久保郷字堂の崎	石造物	台地	110						○		五輪塔・板碑
9	大久保遺跡	大久保郷字小端	遺物包含地	台地	110	○	○						ナイフ形石器・台形石器、石鏃
10	城ヶ岳城跡	大久保郷字城	城跡	山地	250						○		石塁　＜文献②＞
11	大鉢遺跡	木場郷字大鉢	遺物包含地	台地	100	○	○						ナイフ形石器・台形石器、石鏃・石匙・石核
12	丸の松積石塚	太田江郷字丸の松	積石塚	台地	50								
13	大浜遺跡	平郷字長崎鼻	遺物包含地	砂丘	14		○	○					石鏃・石斧・弥生土器
14	長崎鼻A遺跡	平郷字長崎鼻	遺物包含地	砂丘	9	○							ナイフ形石器　＜文献③＞
15	長崎鼻B遺跡	平郷字七郎女瀬	遺物包含地	砂丘	6		○						並木式土器・石鏃・石錘・凹石・敲石　＜文献③＞
16	長崎鼻C遺跡	平郷字長崎鼻	遺物包含地	砂丘	8		○						阿高式系土器・石鋸多数・石錘・凹石・敲石
17	長崎鼻D遺跡	平郷字長崎鼻	遺物包含地	砂丘	8				○				須恵器多数
18	長崎鼻E遺跡	平郷字長崎鼻	遺物包含地	砂丘	9				○				須恵器多数
19	長崎鼻F遺跡	平郷字長崎鼻	遺物包含地	砂丘	9		○						阿高式系土器・剥片
20	長崎鼻積石塚A	平郷字長崎鼻	積石塚	砂丘	10								
21	長崎鼻積石塚B	平郷字長崎鼻	積石塚	砂丘	10								
22	柏岳遺跡	平郷字柏岳	石造物	台地	30						○		石塁
23	宇久松原遺跡	平郷字松原	墳墓	低地	6		○	○					支石墓・石棺墓・甕棺墓・土壙墓・貝製品・板付式小壺〈文献③・④・⑤・⑥・⑪・⑫・⑬〉
24	**宇久山本遺跡**	平郷字山本	遺物包含地	台地	20	○	○	○	○		○		細石核、石鏃、弥生土器、土師器・須恵器、青磁・瓦器・石鍋
25	久保様遺跡	平郷字山本	石造物	台地	25						○		板碑・五輪塔
26	山本五輪塔群	平郷字山本	石造物	台地	40						○		五輪塔
27	宇久城跡	平郷字山本	城跡	台地	30						○		瓦器・青磁　＜文献②＞
28	舜谷寺貝塚	平郷字岡平	貝塚	低地	12						○		石錘・青磁・石鍋・木炭
29	富本遺跡	平郷字富本	石造物	台地	40						○		板碑・五輪塔
30	萱場崎遺跡	小浜郷字萱場崎	遺物包含地	台地	20		○						石鏃・石斧・凹石
31	蒲浦遺跡	平郷字蒲浦三ケ崎	遺物包含地	台地	15		○						石錘
32	唐松遺跡	平郷字境目切絵	石造物	台地	45						○		石塁
33	長野遺跡	小浜郷字長野原	遺物包含地	台地	90	○	○						ナイフ形石器・台形石器・細石核・細石刃、石鏃・石斧
34	福浦遺跡	小浜郷字長尾	遺物包含地	台地	25	○	○						ナイフ形石器・細石核、石槍・石鏃・石斧・石匙・石核
35	招魂場遺跡	平郷字南風栗	遺物包含地	台地	100	○							ナイフ形石器・台形石器
36	城ヶ岳平子遺跡	神浦郷字平子	遺物包含地	台地	80	○	○						ナイフ形石器・細石核・細石刃、石鏃・石匙・礫器・隆線文土器・押引文土器 ＜文献③・⑦・⑨・⑩＞
37	コロノコ遺跡	神浦郷字コロノコ	遺物包含地	台地	60	○	○						細石核・細石刃、石鏃・石匙・石核
38	富江藩代官屋敷跡	神浦郷字久保	屋敷跡	低地	10							○	石垣・井戸
39	神浦白浜遺跡	神浦郷字白浜	遺物包含地	台地	25		○						石鏃・石斧
40	志々岐神社遺跡	神浦郷字白浜	遺物包含地	台地	20	○	○		○				ナイフ形石器、石鏃、須恵器
41	末ノ本遺跡	飯良郷字末ノ木	石造物	台地	90						○		石塁
42	イヒゲ様遺跡	飯良郷字坂	積石塚	台地	30								
43	神崎神社遺跡	飯良郷字村	遺物包含地	台地	20		○	○	○				石鏃・石斧、弥生土器、須恵器・土師器
44	西泊遺跡	飯良郷字西泊	遺物包含地	台地	20				○		○		須恵器、青磁
45	宝林寺廃寺跡	本飯良郷字京塚	寺跡	低地	10							○	板碑
46	久恵の下遺跡	本飯良郷字久恵の下	遺物包含地	台地	30		○		○				石鏃・石斧・凹石、須恵器・土師器
47	宮ノ首遺跡	本飯良郷字汐出	遺物包含地	砂丘	6		○	○	○	○	○		曽畑式・並木式・阿高式・出水式・北久根山式・黒川式・夜臼式・石鏃・石斧・凹石 石錘、板付Ⅱ式・城ノ越式・勾玉・骨製紡錘車、須恵器・土師器、青磁　＜文献⑧・⑫＞
48	厄神社遺跡	本飯良郷字汐出	遺物包含地	台地	10	○	○		○				ナイフ形石器、須恵器
49	白浜遺跡	寺島郷字榎田・白浜	貝塚	砂丘	3		○		○				石鏃・石斧・凹石、須恵器・土師器　＜文献③＞
50	寺島坂遺跡	寺島郷字坂	遺物包含地	台地	25		○						石鏃・石斧・凹石・黒曜石原石
51	寺島積石塚	寺島郷字京塚	積石塚	台地	15								
52	早間遺跡	寺島郷字早間	遺物包含地	台地	20	○	○						台形石器・細石核・細石刃、石鏃・石斧

第1表　宇久町遺跡一覧表

子遺跡（**36**）は1982・84（昭和57・59）年に長崎県立美術博物館による発掘調査（下川・立平1983）が実施され，ナイフ形石器文化から細石器文化を経て土器文化に至る変遷が確認され，炉跡も検出された。それに対して中近世の遺跡は板碑や五輪塔など日常生活とは関連のない遺跡である。このことから，高位溶岩台地は，旧石器・縄文時代においてのみ生活関連の遺跡が立地する環境にあったといえよう。低位溶岩台地には25遺跡がある。そのうち内陸部低位溶岩台地には10遺跡が該当する。時代による内訳は旧石器・縄文時代の遺跡が１遺跡，旧石器時代～中近世に至る遺跡（註５）が２遺跡，中世の遺跡が６遺跡，不明が１遺跡である。これらの遺跡は島の南側に分布し，特に中世の遺跡は南西部の平郷付近に集中する。高位溶岩台地の遺跡と比較すると藤田遺跡（**5**）・宇久山本遺跡（**24**）といった縄文時代以降も長期にわたって営まれた遺跡が存在するのが特徴である。臨海部低位溶岩台地には15遺跡が該当する。時代による内訳は旧石器・縄文時代の遺跡が７遺跡，旧石器時代～中世に至る遺跡が５遺跡，中世の遺跡が１遺跡，不明が２遺跡である。これらの遺跡は宇久島および寺島の臨海部にバランスよく分布している。ほとんどの遺跡が遺物包含地であり，この地域が各時代をとおして生活に適した場所であったといえよう。

低地には４遺跡が立地する。ここの遺跡は宇久松原遺跡（**23**）を除いて，中近世の遺跡である。遺跡は宇久島の南側に分布し，種別は墳墓・貝塚・屋敷跡・寺跡とバラエティーに富んでいる。宇久松原遺跡では1967・68（昭和42・43）年，1977（昭和52）年，1994（平成６）年，1995（平成７）年，1996（平成８）年と宇久町で最も数多く発掘調査がなされ，支石墓やカメ棺墓などが多数検出されている。

砂丘には11遺跡が立地する。宮ノ首遺跡（**47**）と白浜遺跡（**49**）以外は長崎鼻周辺に分布する。長崎鼻周辺の遺跡は旧石器時代から古墳時代の多数の遺跡が所在し，長崎鼻Ｃ遺跡（**16**）からは石鋸が多数採取されている。また宮ノ首遺跡では1990（平成２）年に発掘調査が行われており，古墳時代後期～奈良時代のアワビ貝を中心とする貝塚である。

全体的な立地の状況をみると，山地は遺跡自体が少ない。台地は占める面積が広いこともあり，遺跡数も最も多い。旧石器・縄文時代の遺跡は高位溶岩台地と臨海部低位溶岩台地に多く，旧石器～中近世に至る遺跡は低位溶岩台地に多く，中近世の遺跡は高位溶岩台地と内陸部低位溶岩台地に多いと

		旧石器・縄文	旧石器～中近世	古　　墳	中　近　世	不　　明	合　計
山　　地		0	0	0	1	0	1
台地	高位溶岩台地	6	0	0	4	1	11
	内陸部低位溶岩台地	1	2	0	6	1	10
	臨海部低位溶岩台地	7	5	0	1	2	15
低　　地		0	1	0	3	0	4
砂　　丘		4	3	2	0	2	11
合　　計		18	11	2	15	6	52

第２表　宇久町遺跡立地表

いう傾向がある。低地は面積が狭いこともあり，遺跡数は少ないが種別は全部が異なり，重要なものが含まれる。砂丘はそのほとんどに遺跡が立地するが，中近世の遺跡はない。以上のように宇久町においては地形に応じて遺跡の立地に特徴がある。

［註］

註１　一般に宇久島・小値賀島およびその周辺の島々は，五島列島としてとらえられているが，公式には昭和34年の総理府告示第226号によって平戸諸島に編入されている。

註２　鎌田泰彦 1983「表層地質図」『離島振興開発地域土地分類基本調査　肥前江ノ島・小値賀島・立串・肥前赤島』長崎県土地対策室によると，宇久島を形成した火山活動の時期は新生代新第三紀中新世―鮮新世である。

註３　第三紀更新世（洪積世）に形成された砂丘。

註４　時代が不明の遺跡はいずれも積石塚である。

註５　途中の時代が抜けていても，旧石器時代～中近世の複数の時代にまたがった遺跡という意味。

註６　「町北部」とは町の中心部である平郷の北部の意味。

［引用・参考文献］

長崎県企画部統計課編　1997『平成８年度版 長崎県勢要覧』長崎県企画部統計課

長崎県総務部地方課編　1997『長崎県市町村便覧（平成８年度版）』長崎県市町村便覧

長崎県企画部統計課編　1996『平成８年（第43版）長崎県統計年鑑』長崎県企画部統計課

長崎県土地対策室　1983『離島振興開発地域土地分類基本調査　肥前江ノ島・小値賀島・立串・肥前赤島』長崎県土地対策室

長崎県教育委員会　1995『長崎県遺跡地図』（長崎県文化財調査報告書第119集）　長崎県教育委員会

［第１表の文献］

〈文献①〉　瀬尾泰平　1984「長崎県宇久島の考古遺跡」『長崎県の考古学』Ⅰ　長崎県考古学会

〈文献②〉　平山猛夫　1980『日本城郭大系 17 長崎・佐賀』新人物往来社

〈文献③〉　桑山龍進　1964「五島一般調査報告」『五島遺跡調査報告』（長崎県文化財報告書第２集）長崎県教育委員会

〈文献④〉　宮崎貴夫　1983『長崎県埋蔵文化財調査集報VI』（長崎県文化財調査報告書第66集）長崎県教育委員会

〈文献⑤〉　本田秀樹　1996「宇久松原遺跡カルテ」『長崎県埋蔵文化財調査年報III』（長崎県文化財調査報告書第125集）長崎県教育委員会

〈文献⑥〉　本田秀樹　1996「宇久松原遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書IV』（長崎県文化財調査報告書第130集）長崎県教育委員会

〈文献⑦〉　下川達彌　1983『城ヶ岳平子遺跡 ―第一次調査概報―』長崎県立美術博物館

〈文献⑧〉　宮崎貴夫　1991『宮ノ首遺跡』宇久町文化財調査報告書第２集　宇久町教育委員会

〈文献⑨〉　下川達彌　1996「城ヶ岳平子遺跡」『原始古代の長崎県 資料編Ⅰ』長崎県教育委員会

〈文献⑩〉　桑山龍進　1967『宇久町郷土誌』宇久町役場・宇久町教育委員会

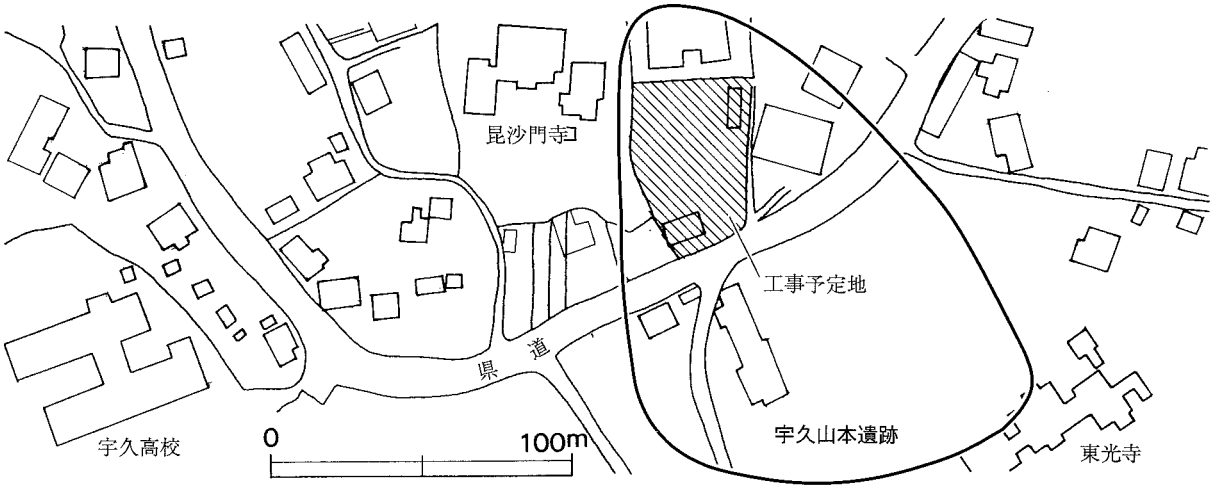
〈文献⑪〉　小田富士雄　1970『五島列島の弥生文化 総説篇』長崎大学医学部解剖学第二教室

〈文献⑫〉　宮崎貴夫　1996「宇久松原遺跡」『原始古代の長崎県 資料編Ⅰ』長崎県教育委員会

〈文献⑬〉　安楽　勉　1996「宇久松原遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査年報III』（長崎県文化財調査報告書第125集）長崎県教育委員会

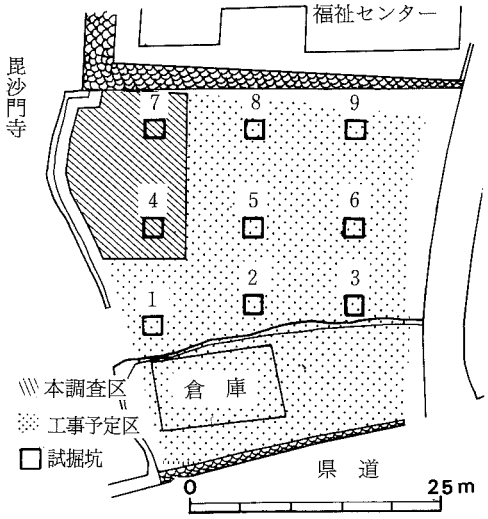
II　調査に至る経緯

当地は古くから黒曜石剝片・弥生土器・中世陶磁器等が表面採集されることで知られていた。最初に文献に登場するのは『五島一般調査報告』（桑山1964）で「町北部（註６）背後の丘陵の東光寺・小学校・毘沙門堂にわたる15m前後の起伏台上は，黒耀石石鏃石器類極めて多く，小学校々庭よりは勾玉１個出土しているが現物は所在不明である。」（註は筆者）とある。また，1976（昭和51）年文化庁発行の『全国遺跡地図　長崎県』では，東光寺背後丘陵遺跡の名称で記載されており，山本遺跡の名称が用いられるのは1987（昭和62）年長崎県教育委員会発行の『長崎県遺跡地図』長崎県文化財調査報告書第87集からである。発掘調査はこれまで行われたことはなかった。

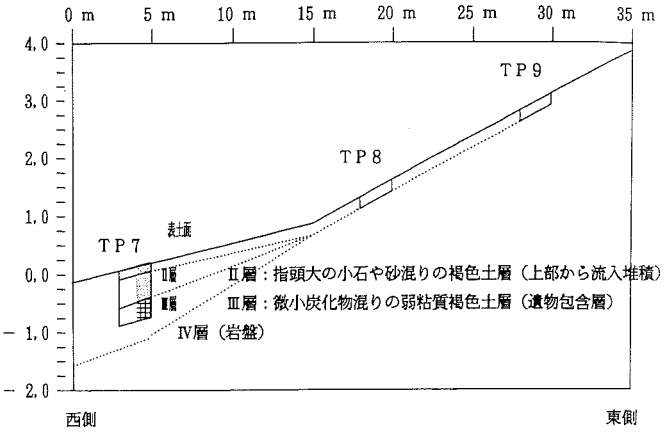


第５図　調査区周辺図〔１：2,500〕

今回の発掘調査の発端は，1995（平成７）年10月本遺跡内に保健センターの建設が計画されたことによる。この事業は国庫補助事業であり，７年度中に工事の30％を進捗させねばならないため，早急に発掘調査の有無を判断する必要が生じた。そのため，小値賀町教育委員会塚原博主査に依頼し，視察調査を実施した。その結果，工事予定地の北側部分は自然地形が残っており，黒曜石・玄武岩製の石器，縄文・弥生土器片，国産・輸入陶磁器片等が散在しているため，少なくとも範囲確認調査の必要性があるとの結論に達した。そこで，北側部分に９箇所の試掘坑（２×２m）を設定し，調査を実施した。調査の結果，第４試掘坑および第７試掘坑で遺物包含層が確認されたが，保健センター建設地の変更が困難なため，緊急発掘調査を実施し記録保存することとなった。



第６図　調査区図〔１：750〕



第７図　調査地点土層模式図

Ⅲ 調　　査

1．調査の概要

調査期間は当初平成７年12月11日～12月15日の予定であったが，遺構が検出されたため12月21日まで延期された。調査区は保険センター建設予定地のうち，範囲確認調査で包含層が確認された北西部分，100㎡とした。調査区は北側を１区，南側を２区とした。

12月11日(月)　現地視察，調査方法の検討

12月12日(火)　表土と撹乱層を重機で除去後掘り下げ，土層状況確認のためトレンチの設定
暗渠配水施設の検出，多量の黒曜石製石器等出土

12月13日(水)　トレンチ調査の結果，堆積量の多い１区北側部分を中心に掘り下げ
聞き取りにより暗渠配水施設は戦後に造られたものと判明

12月14日(木)　２区東側部分掘り下げ，１区北側を精査
１区北側部分より中世の包含層確認，１区東部分より地山(安山岩風化土層)確認

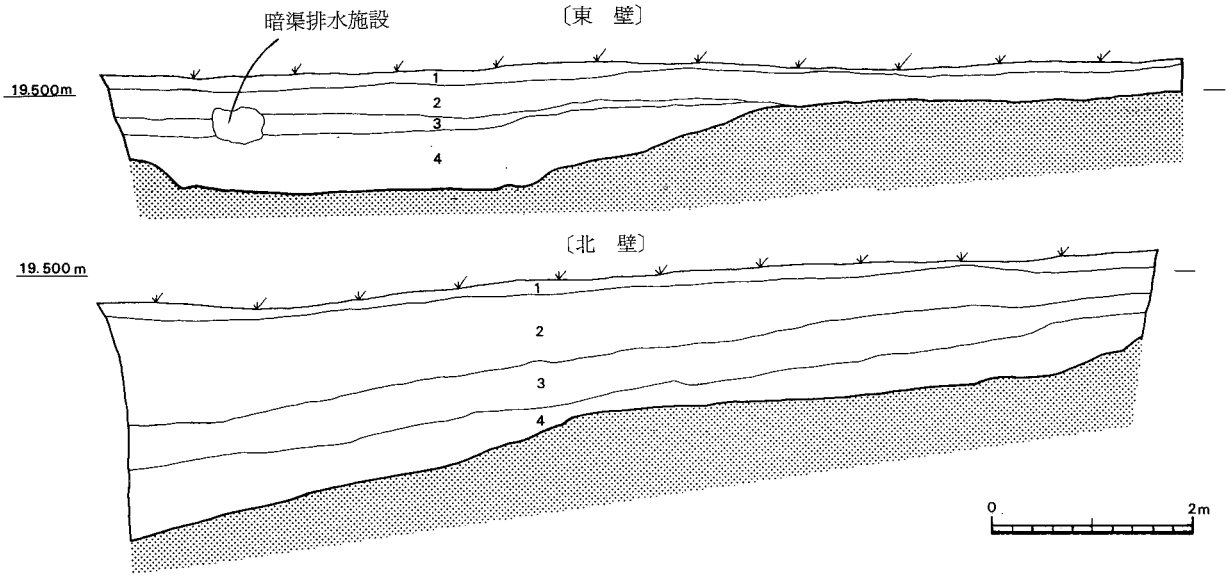
12月15日(金)　１区北側を中心に精査
柱穴および土坑検出，白磁・青磁・須恵器出土

12月18日(月)　１区南側掘り下げ・精査
柱穴および土坑検出，白磁・青磁・土師質土器・石鍋・古銭出土

12月19日(火)　２区掘り下げ・精査，写真撮影
柱穴および土坑検出，白磁・青磁・須恵器・土師質土器出土

12月20日(水)　土層断面（北壁）実測，写真撮影
柱穴・土坑検出

12月21日(木)　調査区実測，土層断面（東壁）実測，写真撮影
調査終了



第８図　土層断面図〔Ｓ＝１/75〕

2．土　　層（第8図）

土層は基本的に5層に大別できた。

第1層　赤褐色土層。耕作土である。黒曜石剝片等が表面採集される。

第2層　赤褐色混礫土層。0.5～2cmの風化礫を多く含む。聞き取りによると地形が傾いているため土砂が流出するたびに盛り直したということである。旧石器時代～中世にかけての小さく破壊された遺物が混在する撹乱層である。

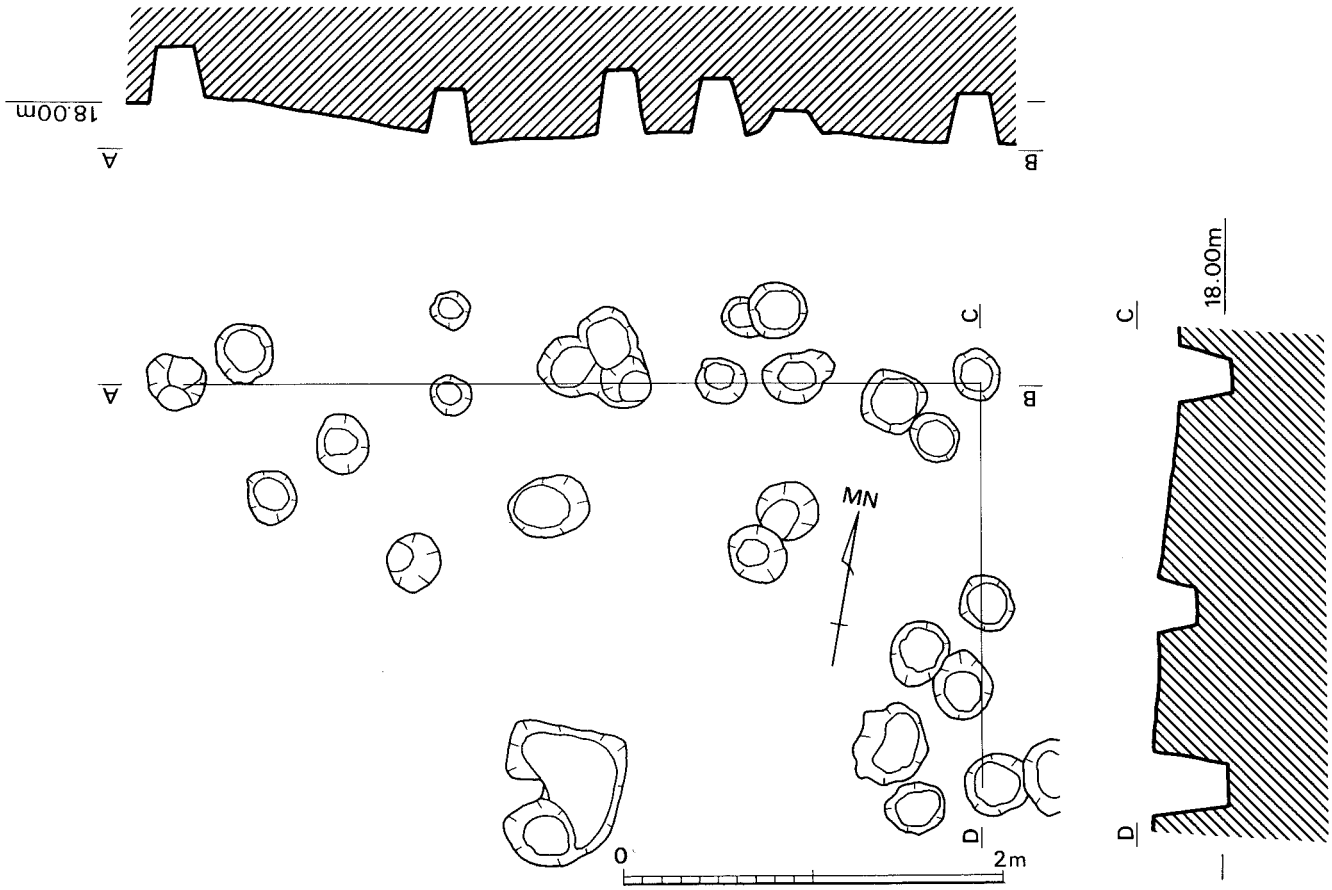
第3層　茶褐色混礫土層。 0.5～2cmの風化礫を多く含む。旧石器時代～中世にかけての遺物が混在する撹乱層である。

第4層　黒褐色混礫土層。2cm大の礫と炭化物を多く含む。しまりがよくやや粘性がある。中世の遺物包含層である。

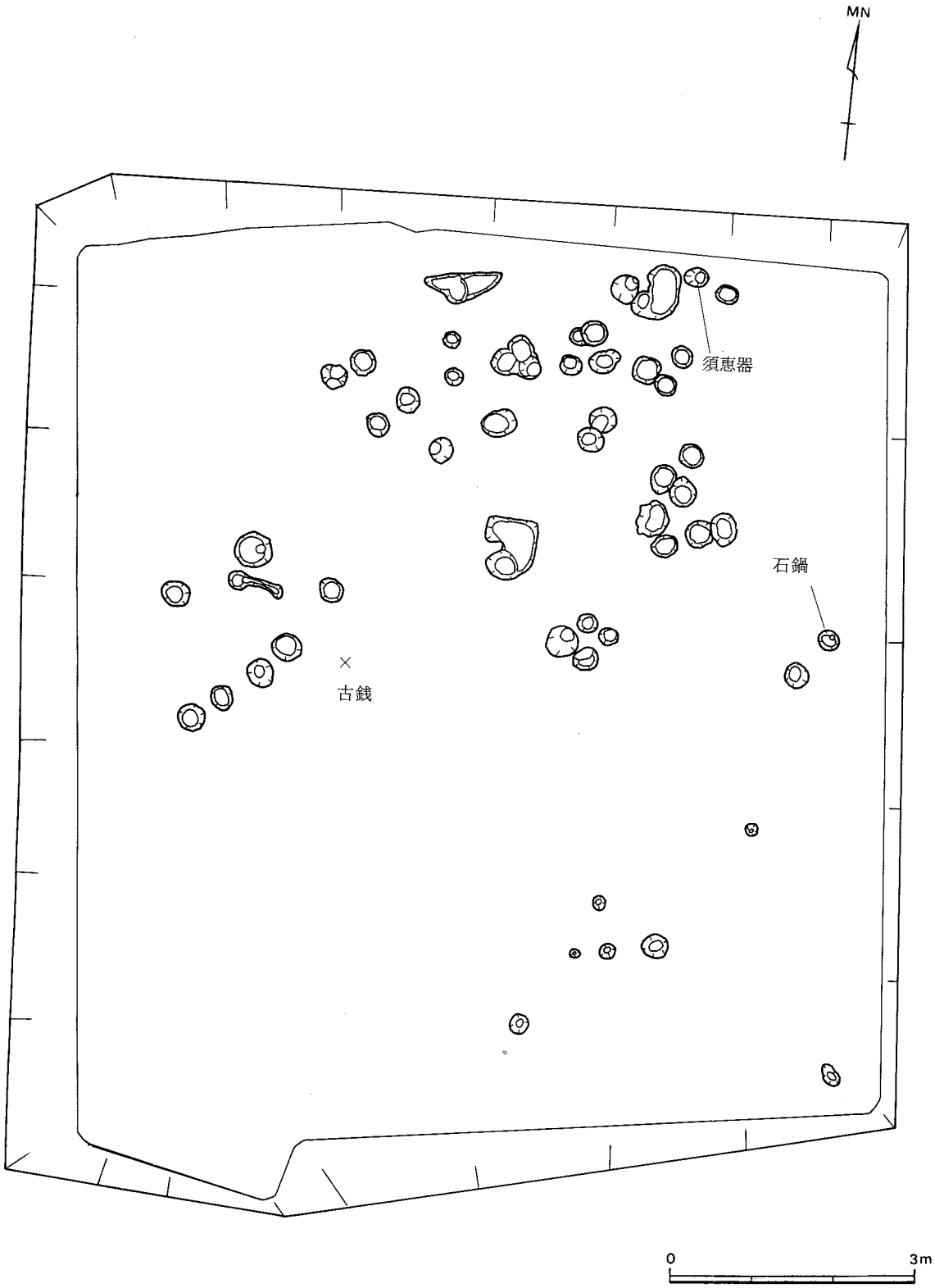
第5層　黄褐色粘質土層。安山岩の風化土層である。柱穴等が掘り込まれている。

3．遺　　構（第9・10図）

調査区の北側に集中して60基の柱穴が検出された。中世の包含層の直下の地山面に掘り込まれており，柱穴中から石鍋・須恵器片が出土しているため，中世の柱穴と思われる。明確に建物跡と断定できる一群は確認できなかったが，直線上に並ぶ柱穴列が幾通りか認められた。なお，この場所は地山面にはかなりの傾斜があるため，建築物を構築する上で適所であるとはいいがたいため，柵列の可能性も高い。



第9図　柱穴遺構復元図〔S＝1/40〕



第10図　柱穴遺構実測図〔S＝1/75〕

Ⅳ 遺　物

1．石　器

宇久山本遺跡からは，2,000点を越す縄文時代晩期の石器が出土している。石器はすべて１層および２層の撹乱層からの出土で、包含層は認められなかった。１層は耕作土，２層は中世以降の流れ込みもしくは客土されたと思われる土層で，石器は原位置を遊離しており，旧石器時代の遺物も数点含まれているがそれを除けば縄文時代晩期の一時期の所産として大過ないであろう。

(1) 旧石器時代の石器

①角錐状石器（**第11図１**）

ナイフ形石器に伴う石器で，松浦星鹿半島産の漆黒黒曜石の分厚い縦長剥片を素材とし，背面には自然面を一部残す。主要剥離面側から荒いタッチのブランティングが両側縁に施されている。先端部をわずかに欠く。姶良火山灰（ＡＴ）降灰後のナイフ形石器群に普遍的にみられるものである。

②細石核（**第11図２**）

１と同じく漆黒黒曜石を素材とする。残念なことに発掘時に半截したらしく，半分しか現存しない。そのために細石刃剥離作業面がどのようなものであったか詳細は不明である。全面に残された細石刃剥離作業面は緩く弧を描いており，側面側にも広がっているところから判断すると円錐形に近いものと思われる（下川1983)。打面部は全面にわたってダメージを受けておりまったく看取できない。

(2) 縄文時代晩期の石器

①石鏃（**第11図３～22**）

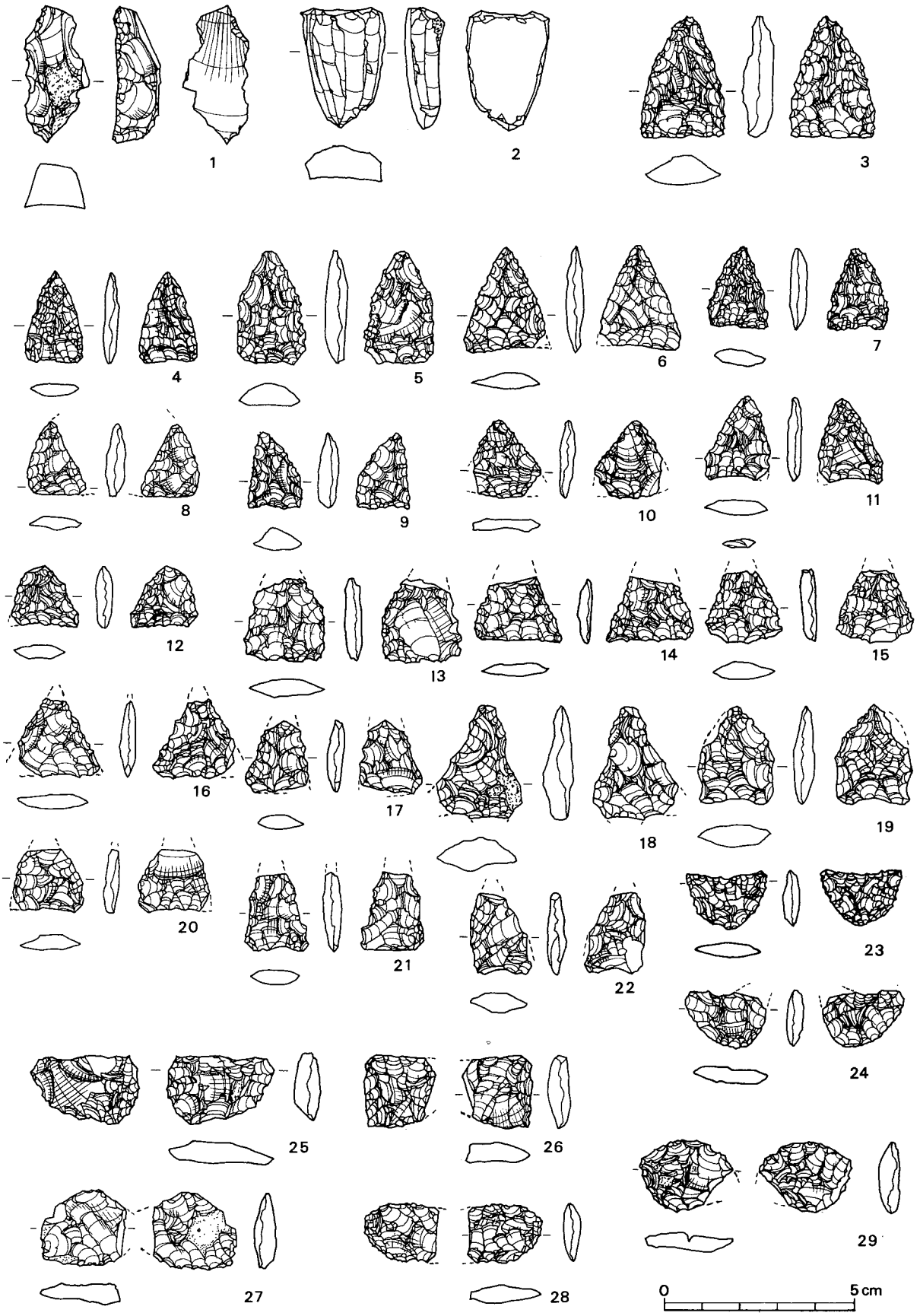
宇久山本遺跡から出土した石鏃は斉一性が高い。その基本的な形態は，わずかに縦が長い二等辺三角形で，基部は直線的な平基かもしくはわずかに凹基になる。両側縁が若干弧を描くものが多い。また**８・９**のように左右が非対称のものもある。**３**と**５・18**は重量が３ｇを越える大形の石鏃である。佐世保市淀姫産と思われる青灰色黒曜石を素材とするものが４点，松浦星鹿半島もしくは伊万里市腰岳産と推測される漆黒黒曜石を素材とするものが20点を占め，その比率は１：５である。

②サイドブレイド（**第11図23～29**）

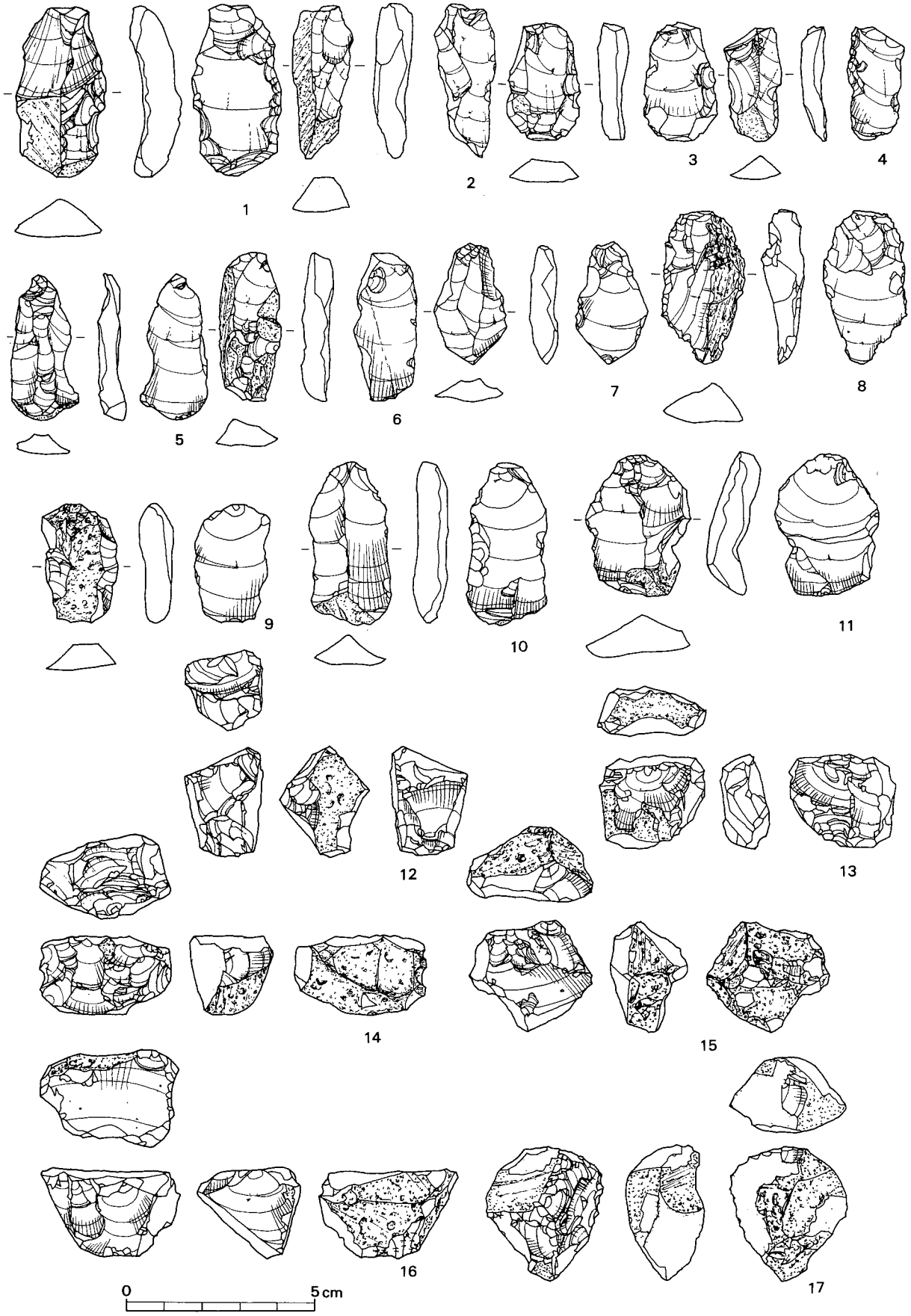
23～29は黒曜石製のサイドブレイドである。**23・24**は半月形を呈し，表裏両面とも丁寧な調整加工が施され，薄手に仕上げられている。**25～29**は，**23・24**に比べると分厚く，形態的にも均整がとれず，その変化に富むものの，サイドブレイドと認識される。**24・27**が青灰色黒曜石製で他は黒色黒曜石製である。

③剥片（**第12図１～11**）

本遺跡からは膨大な量の剥片および砕片が出土しているが，ここには11点の縦長を呈するものを選択して図示した。**８**の青灰色黒曜石を除けばすべて黒色黒曜石である。器表面側の一部に礫面を有するものがほとんどである。



第11図　石器実測図１〔Ｓ＝２／３〕



第12図　石器実測図②〔S＝2/3〕

	黒色黒曜石	青灰色黒曜石	そ の 他	合 計
石 鏃	18	3	0	21
局部磨製石鏃	1	0	0	1
サイドブレイド	6	2	0	8
石 核	55	3	0	58
剝 片	834	43	0	877
砕 片	1066	42	0	1108
磨 製 石 斧	0	0	1	1
扁平片刃石斧	0	0	1	1
合 計	1980	93	2	2075

第 3 表　縄文時代晩期の石器組成表

④石核（**第12図12～17**）

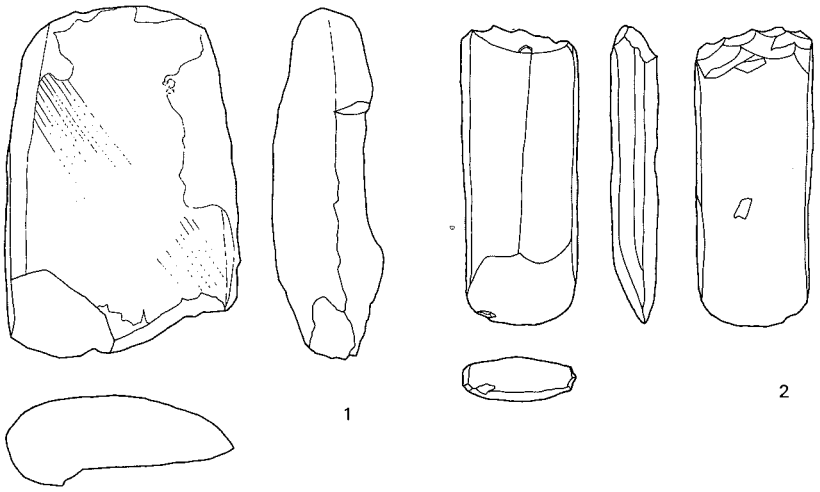
60点余り出土している中から，６点を図示した。いずれも３～４cmの鶏卵大程度の黒曜石原石を素材としている。素材となる黒曜石原石は，佐世保市淀姫産と思われる青灰色を呈するものと，黒色を呈し平滑な礫面をもつ角礫状のものと同じく黒色で亜角礫状を呈するものの３種類がある。

⑤磨製石斧（**第13図１**）

刃部と背面の大部分を欠損する。敲打整形されたのちに丁寧に研磨されている。砂岩製である。

⑥扁平片刃石斧（**第13図２**）

頁岩製の小形の片刃石斧で，基部側を欠損する。側辺はほぼ平行し，図の正面および裏面の中央にわずかな稜をもつ。刃部は緩く弧を描く。全面に丁寧な研磨が施される。



第13図　石器実測図③〔１－Ｓ＝１／２，２－Ｓ＝２／３〕

図	番	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
11	1	角錐状石器	黒色黒曜石	(3.5)	1.7	1.0	(5.9)	先端欠
	2	細石核	黒色黒曜石	3.1	2.2	(0.9)	(7.3)	打．背面欠
	3	石鏃	黒色黒曜石	3.3	2.2	0.8	4.1	
	4	石鏃	黒色黒曜石	2.4	1.5	0.3	0.8	
	5	石鏃	黒色黒曜石	3.0	1.8	0.6	3.1	
	6	石鏃	青灰色黒曜石	2.7	2.1	0.4	1.7	
	7	石鏃	黒色黒曜石	2.1	1.6	0.4	1.1	
	8	石鏃	黒色黒曜石	(1.9)	(1.5)	0.3	(0.8)	
	9	石鏃	黒色黒曜石	2.0	1.4	0.5	1.1	
	10	石鏃	黒色黒曜石	2.0	(1.8)	0.3	(1.0)	
	11	石鏃	黒色黒曜石	2.3	1.7	0.3	(0.9)	
	12	石鏃	黒色黒曜石	1.5	(1.8)	0.4	(0.9)	
	13	石鏃	青灰色黒曜石	(2.2)	(2.1)	0.5	(2.1)	
	14	石鏃	黒色黒曜石	(1.7)	(2.3)	0.3	(1.1)	
	15	石鏃	黒色黒曜石	(1.9)	(2.0)	0.4	(1.4)	
	16	石鏃	黒色黒曜石	(2.1)	(2.1)	0.4	(1.3)	
	17	石鏃	黒色黒曜石	(1.9)	(1.6)	0.4	(1.1)	
	18	石鏃	黒色黒曜石	(3.0)	(2.3)	0.8	(3.4)	
	19	石鏃	黒色黒曜石	2.6	2.0	0.5	(2.3)	
	20	石鏃	黒色黒曜石	(1.7)	(1.9)	0.3	(1.0)	
	21	石鏃	黒色黒曜石	(2.1)	(1.7)	0.5	(1.3)	
	22	石鏃	青灰色黒曜石	(2.2)	(1.5)	0.4	(1.3)	
	23	石鏃	黒色黒曜石	1.5	2.1	0.3	0.9	
	24	石鏃	黒色黒曜石	1.6	(2.1)	0.4	(1.2)	
	25	サイドブレイド	黒色黒曜石	2.8	1.8	0.6	3.0	
	26	サイドブレイド	黒色黒曜石	(1.8)	(1.9)	0.5	(1.9)	
	27	サイドブレイド	青灰色黒曜石	(2.1)	2.0	0.5	(2.4)	
	28	サイドブレイド	黒色黒曜石	(2.0)	1.5	0.4	(1.2)	
	29	サイドブレイド	黒色黒曜石	(2.4)	1.9	0.5	(2.1)	
12	1	剝片	黒色黒曜石	4.8	2.4	1.0	9.8	
	2	剝片	黒色黒曜石	4.2	1.6	0.9	5.6	
	3	剝片	黒色黒曜石	3.2	1.9	0.7	5.0	
	4	剝片	黒色黒曜石	3.0	1.5	0.5	2.2	
	5	剝片	黒色黒曜石	3.8	1.8	0.6	3.4	
	6	剝片	黒色黒曜石	4.0	1.5	0.6	4.9	
	7	剝片	黒色黒曜石	3.2	1.9	0.6	3.3	
	8	剝片	青灰色黒曜石	4.1	2.3	1.1	7.3	
	9	剝片	黒色黒曜石	3.2	2.0	0.8	5.0	
	10	剝片	黒色黒曜石	4.3	2.1	0.9	6.9	
	11	剝片	黒色黒曜石	3.9	2.8	1.0	9.9	
	12	石核	黒色黒曜石	3.0	2.1	2.2	11.0	
	13	石核	黒色黒曜石	2.5	3.2	1.2	9.3	
	14	石核	黒色黒曜石	2.1	3.6	2.1	17.6	
	15	石核	黒色黒曜石	3.0	3.4	2.0	14.7	
	16	石核	黒色黒曜石	2.7	3.8	2.7	22.0	
	17	石核	黒色黒曜石	3.6	3.2	2.1	19.3	
13	1	磨製石斧		(9.2)	6.2	(2.4)	(197.8)	
	2	扁平片刃石斧		(5.9)	2.3	0.9	20.4	

第4表　宇久山本遺跡出土石器一覧表　※（　）は欠損である

(3) 小　結

2点の旧石器を除外した宇久山本遺跡の石器群と同じような組成をもつ石器群としては，西海町ケイマンゴー遺跡（福田1980），大村市黒丸遺跡（稲富1980），小浜町朝日山遺跡（高野1981）などがあげられる。

この時期の石器群についてはいくつかの論考がある(橘1984，橘1987，吉留1993)。橘は該期の剝片剝離技術に着目し，小形の原石を素材として不定形な剝片を剝出する技法を「十郎川型剝片隔離技術」として提唱した（橘1984)。宇久山本遺跡にみられる大量の石核および剝片はまさしく「十郎川型剝片剝離技術」によるものであることは間違いない。石核と剝片の比率は1：15であり，単純計算では石核1点から15本の不定形な剝片を作り出したことになり，不経済な剝片剝離技術である。

石鏃については，その基部が平基もしくは浅い凹基になることや，形態が左右非対称で直線的にならないものがあること，調整剝離が粗雑な大形のものが出現することを特徴として抽出できよう。サイドブレイドもこの時期の石器群の一員である。半月形を呈するものが十郎川遺跡にも出土しており，両者の近縁性を示すものであろう。こうしたことから宇久山本遺跡の編年的位置については，土器からみても縄文時代晩期後葉の夜臼式土器段階において大過ないものと思われる。

[引用・参考文献]

稲富裕和　1980『黒丸遺跡』大村市黒丸遺跡調査会

下川達彌　1983『城ヶ岳平子遺跡第1次調査概報』長崎県立美術博物館

高野晋司　1981『朝日山遺跡』（小浜町文化財調査報告書第1集）小浜町教育委員会

橘　昌信　1984「縄文時代晩期の石器―西北九州における縄文時代の石器研究（六）―」『史学論叢』第12号

橘　昌信　1987「縄文時代晩期および弥生時代の剝片石器」『東アジアの考古と歴史』中巻

萩原博文・久原巻二　1975「九州西北部の石鋸，サイドブレイドについて」『古代文化』第27巻4号

久村貞男　1994『四反田遺跡発掘調査報告書』（平成5年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書）佐世保市教育委員会

福田一志　1980「縄文時代の石器」『ケイマンゴー遺跡』（長崎県文化財調査報告書第52集）長崎県教育委員会

吉岡完祐　1982『十郎川』住宅・都市整備公団

吉留秀敏　1993「縄文時代後期から晩期の石器技術総体の変化とその評価―早良平野を中心として―」『古文化談叢』第30集

2．土器・陶磁器

遺物は包含層中より出土している。遺物の取り上げは原位置を記録しながらおこなっているが，諸般の事情により，ここでは包含層出土遺物として一括したい。

(1) 縄文土器（第17図61）

図示できたのは１点のみである。深鉢形土器の底部片の資料で，底径は10cmである。外面は赤褐色，内面は茶褐色，胎土には石英粒，砂粒を多く含む。夜臼式土器の底部の可能性が高い。

(2) 貿易陶磁（第14・15図）（註１）

①中国製陶磁

・北宋後半代の白磁（1～7）

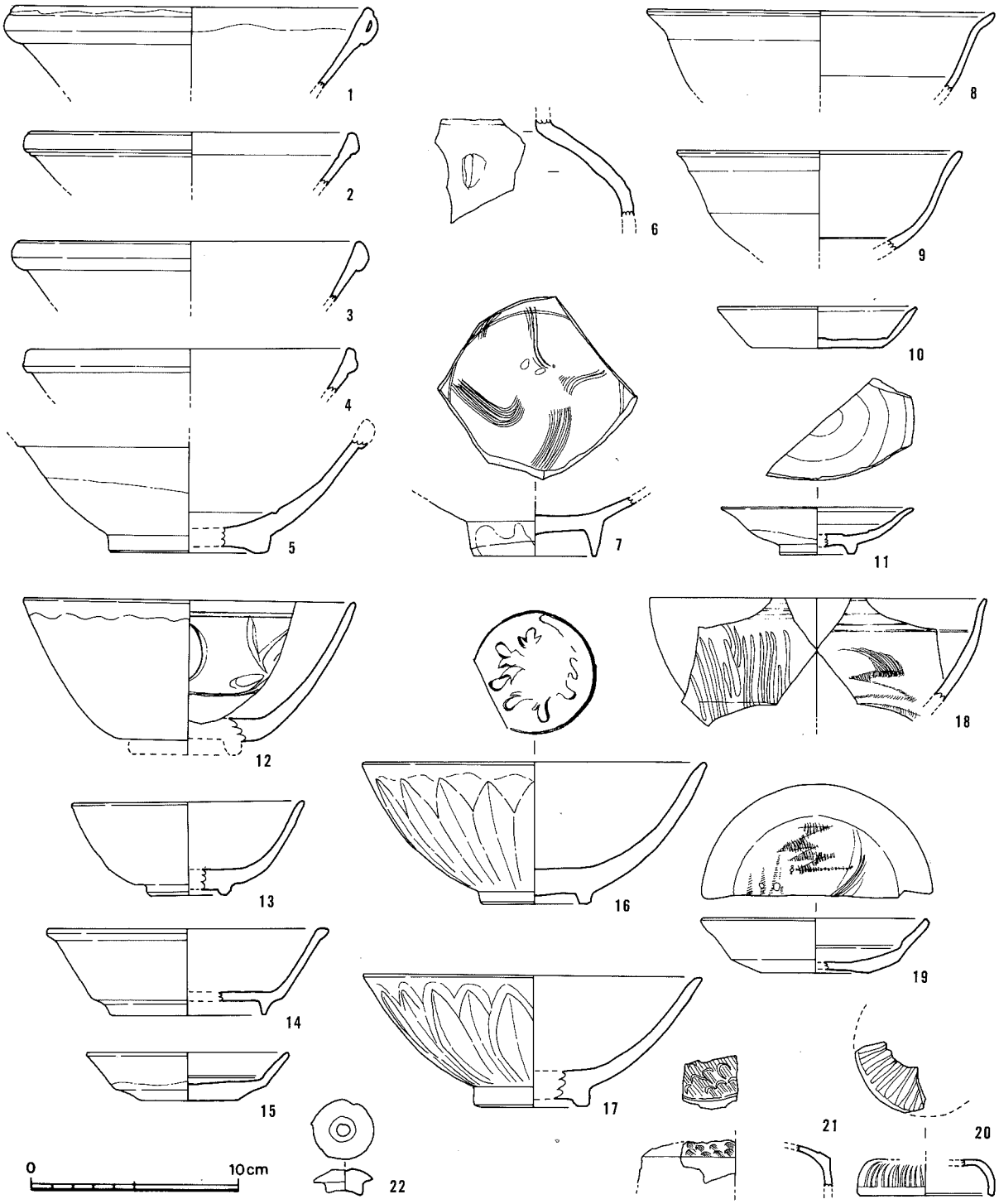
1～5はいずれも大きな玉縁口縁を有する白磁碗IV類の細片である。1は復元口径17.8cm，釉は灰白色で，口縁部内外面には釉垂れがおきている。断面には気泡による小さな間隙が多くみられる。口縁部には玉縁を折り返して成形した痕跡が明瞭に残る。素地は灰白色である。2は復元口径16.0cmで，口縁部内面に沈線をもつ。釉は暗灰白色，断面に若干の気泡による間隙がみられるが緻密である。素地は灰黄色である。3は復元口径17.0cm，釉は暗灰白色で，胎土はやや粗い。素地は黄灰色である。4は復元口径16.0cm，釉は灰白色で胎土はやや粗い。素地は灰白色である。5は口縁部端を欠失しているが残存部より白磁IV類と考えられる。体部下半と高台畳付けおよび高台内は露胎である。内面見込には段を有する。釉は暗灰白色で，断面に気泡による間隙がみられる。素地は灰黄色である。6は白磁四耳壺片である。小片で胴部径などの復元はできなかった。釉は明灰白色で胎土は緻密，素地は灰白色である。7は白磁碗Ｖ類４ｂの底部である。高台径は5.8cm，高台内は露胎である。内底見込には浅い沈線状の段を有し，中には櫛による花文が施される。釉は灰色味が強い灰白色，胎土は緻密で，素地は灰白色である。

・口禿の白磁（8～11）

8～11は白磁IX類とされる口禿の白磁である。8は端反の碗片で，復元口径16.6cmを測る。釉は灰白色で，胎土はやや粗い。素地は灰白色である。体部内面には浅い沈線をめぐらす。9も端反の碗片で，復元口径13.6cmを測る，内底見込に沈線をめぐらす。釉は灰白色，胎土はやや粗く，素地は灰白色である。10は皿片で，口縁端部は面とりして矩形を呈す。内底見込には段を有し，底部の釉を拭きとっている。釉は灰白色，胎土は緻密で，素地は灰白色を呈する。口径9.6cm，器高2.0cm，底径6.1cmを測る。11は2/3が残存した杯片である。復元口径は9.2cm，器高2.3cm，復元高台径3.6cmである。口縁部は端反で，体部下半および高台畳付けと高台内は露胎である。体部内面には２本の沈線をめぐらす。見込は蛇の目状に釉剝ぎされる。釉は灰白色，胎土はやや粗で，素地は灰白色である。

・龍泉窯系青磁（12～17）

12は龍泉窯系青磁碗のＩ－２ａ類片で，復元口径は15.8cmである。口縁部外面には釉垂れが生じ，高台は欠失するが露胎とみられる。内面見込には段をもち，内面に草花文を片彫りする。釉は明黄褐



第14図　貿易陶磁器実測図①〔S＝1／3〕

色，胎土は緻密で，素地は灰白色である。**13**は素文の小碗でⅠ－4類とみられるが高台から体部への立ち上がりの形が異なる。1/3が残存する。復元口径11.2cm，器高4.5cm，高台径4.0.cmを測る。釉は青味をおびた緑色で，胎土は緻密である。素地は灰白色である。**14**は杯Ⅲ－1ａ類片で1/3が残存する。無文で高台部分より直線的にひらく器形である。口縁部は「く」字状に屈折し，口縁端部は平坦になっている。復元口径13.4cm，器高4.2cm，復元高台径7.4cmである。釉は暗緑色で，胎土は緻密で

ある。素地は灰白色である。全面施釉で貫入がはいる。高台畳付けは鉄足化している。**15**は皿Ｉ－２類で，完形で出土した。口径9.6cm，器高2.3cm，底径4.8cmである。体部下半から底部にかけての釉を拭きとる。内底見込には段をもつ。釉は緑灰色で，胎土は緻密である。素地は灰白色を呈す。

16は鎬蓮弁文が施された碗Ｉ－５ｂで，1/2が残存する。復元口径は16.4cm，器高6.8cm，高台径5.3cmである。体部から高台に釉がかかり，貫入がはいる。高台畳付および高台内は露胎である。内底見込には花文を型押しする。釉は明黄褐色，胎土は緻密で，素地は灰白色である。**17**も鎬蓮弁文碗Ｉ－５ｂで，1/2が残存する。復元口径16.2cm，器高6.3cm，高台径5.5cmである。高台畳付および高台内は露胎である。内底見込には段をもつ。釉は緑灰色で，胎土は緻密である。素地は灰白色を呈す。

・同安窯系青磁(**18・19**)

18は碗Ⅲ－１ｂ類片で，復元口径は16.1cmである。体部にはヘラ状の施文具により，片彫りの沈線文が施される。体部下半は露胎である。口縁部はわずかに外反し，体部内面には櫛歯状の施文具によってジグザグ文を描く。釉は飴色のガラス質で，胎土は緻密である。素地は灰白色をなす。**19**は皿Ｉ－２類で1/2が残存する。口径10.9cm，器高2.6cm，底径5.0cmを測る。全面施釉ののちに底部の釉を拭きとっている。釉は明黄褐色で貫入が入る。胎土は緻密である。素地は明黄褐色である。

・青白磁（**20**～**22**）

20は型押しによる平形合子の蓋である。1/3ほどが残存する。復元口径は6.4cmである。口縁端部から内面にかけては露胎である。釉は青白色で，胎土は緻密，素地は明灰白色を呈す。**21**も合子蓋である。天井部の文様はいくつもの小突起をもつ。陶胎で釉は黄灰色，素地は白黄色である。**22**は壺形合子の蓋である。笠状の径は2.9cm，残存高は1.25cmである。頂部はくぼんでいる。胎土には白色の小さな砂を含む。釉は笠状の外面のみにかかり，色調は緑がかった黄色である。

・明青花（**23**）

皿の細片で，小野編年の染付端反り皿Ｂ１群（Ⅶ）に属する資料である（小野1982)。高台畳付けは砂敷焼成のため露胎に近い。内面には二重の界線と玉取獅子が描かれる。外面は牡丹唐草が施される。時期は15世紀後半から16世紀前半にかけてとされる。

・白磁（**27**）

香炉ないしは火入れの口頸部片とおもわれる。残存率は1/4である。口縁部は肥厚させて内側に突出させている。釉は暗灰白色で釉が均一にかからず，小さな釉の窪みが多くみられる。口縁部内面下半は露胎である。胎土は緻密で，素地は明灰白色である。

・陶器（**24**～**26**）

24は中国製の黒褐釉四耳壺（森本1997）の口縁部片である。1/4が残る。釉は黒褐色で，胎土には微細な白い砂粒が混じる。素地は暗灰色である。復元口径は6.8cm，口縁部は折り返して作出される。**25**は褐釉玉縁口縁甕（森本1997）片である。復元口径は21.2cmを測る。玉縁口縁をもち，口縁部は釉剝ぎされる。釉は緑灰色で，素地は灰色，口縁下は露胎である。露胎部分は淡褐色を呈する。**26**は褐釉陶器の底部であるが器種等は不明である。復元底径は8.8cmで，内面には粘土の継目痕が残る。釉は茶褐色を呈す。胎土は不純物は少ないが，ザラッとしている。

②朝鮮製陶磁

・粉青沙器（**28**～**30**）

28は皿片である。復元口径は9.4cmほどである。口縁部内面には釉垂れがみられる。釉は緑がかった灰色で，胎土は粗く，素地は黄褐色を呈する。**29**は碗の底部片である。高台は低く，全面施釉である。底部内面は釉が縮れ，梅皮状になっている。高台径は4.4cmである。内面見込には４つの目跡が残る。胎土は均一であるが粗い。素地は黄褐色である。内底見込には白土が螺旋状に象嵌されている。**30**も碗の底部片で高台は低い。釉は灰褐色で胎土は緻密である。素地は明褐灰色である。見込には褐色の土によって螺旋状に象嵌されている。

(3) 国産土器（第16図）

①瓦質土器

・釜（**31**・**32**）

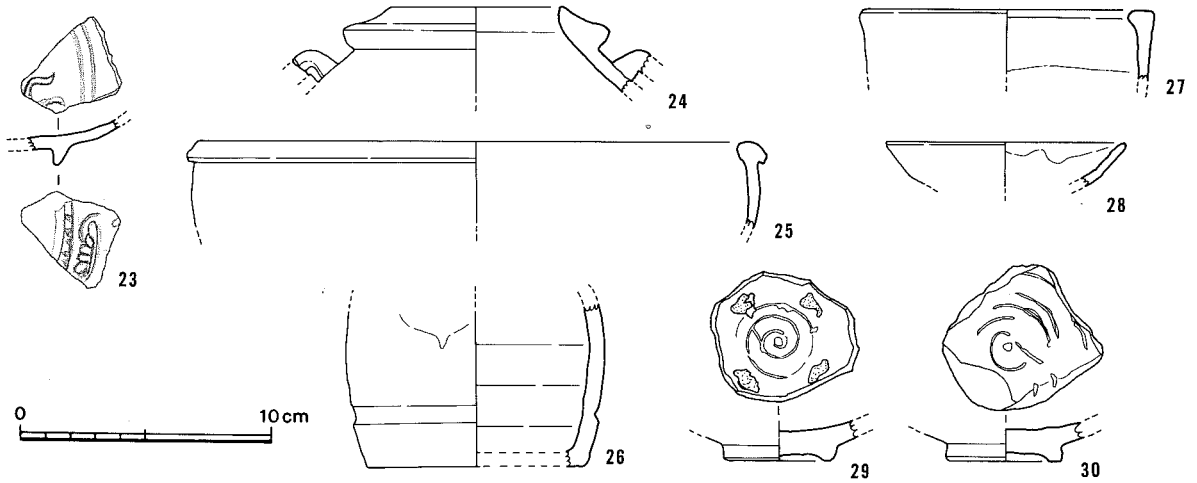
31と**32**はいずれも復元口径26.0cm前後で，同一個体の可能性が強い。口縁部端は受け口状となり，外に若干突出する。口縁部下2.5cmほどのところに鍔をまわす。色調は外面が灰褐色，内面は灰色である。胎土には砂粒や絹雲母が含まれ，粗である。口唇部はヘラナデによって段を生じている。体部内面には指押さえやケズリの痕跡が確認できる。

②東播系須恵器（**33**～**35**）

いずれも捏鉢で，異個体の資料である。**33**は復元口径23.0cm，色調は内外面ともに青味がかった灰色で胎土に白色の微細な砂が混じる。**34**は復元口径26.6cmで，色調は内外とも明灰色を呈する。胎土には若干の石英粒が混じる。口縁部外面は重ね焼のため，暗灰色となる。**35**は復元口径25.4cmで，色調は内外とも灰色を呈する。胎土には赤色砂が若干混じる。これらの中世須恵器は荻野編年のVI期(13世紀前葉・中葉）に該当すると考えられる（荻野1990)。

③備前焼（**44**）

細片のため口径を復元することはできない。擦り目は確認できないが，擂鉢と考えられる。外面は



第15図　貿易陶磁器実測図②〔S＝1/3〕

「く」字状に屈曲し，さらに口縁部下半が突帯状に突出する。色調は赤褐色で胎土には白色砂が混じり，表面にもあらわれている。この資料は伊藤編年のⅣ期に該当するとみられ，14世紀後半から16世紀前半とされる（伊藤1995）。

④回転台土師器（**38**～**43**）

・搬入土師器（**38**）

38は残存率1/3の杯片である。復元口径は16.2cm，器高3.0cm，復元底径12.6cmである。底部は糸切り離しで，底部付近は浅く段をつけてヨコナデされている。色調は白黄色で，胎土には金雲母，赤色砂を含むが，水簸されて精良である。全体はヨコナデによって丁寧に成形されている。

・在地系土師器（**39**～**43**）

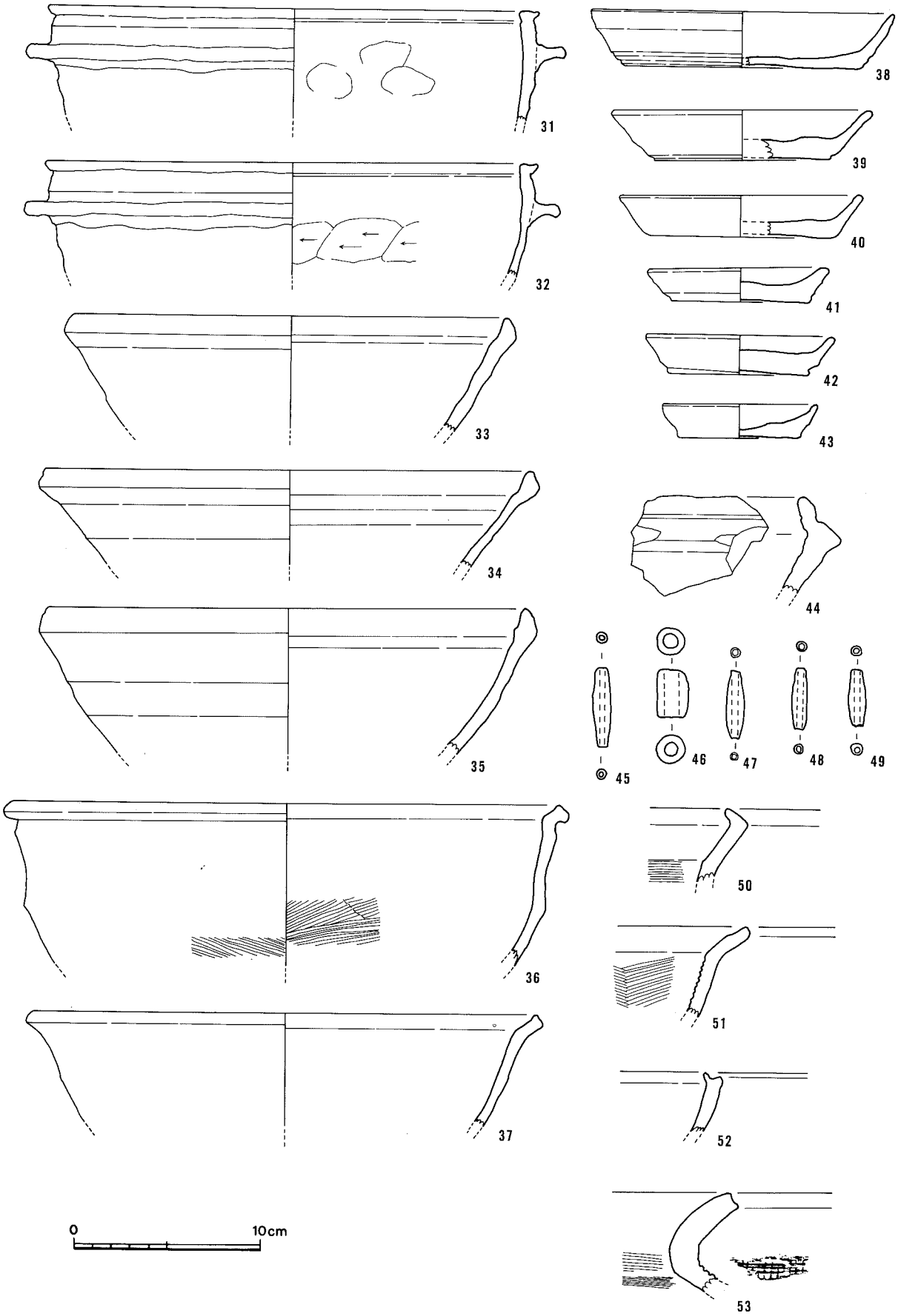
39は残存率1/3の杯片である。復元口径は13.8cm，器高2.7cm，底径9.4cmである。底部の器壁は厚い。色調は赤褐色で，胎土には1～2mmの石英粒，赤色砂，絹雲母を含む。底部は糸切り離しである。**40**も1/3が残存する杯片である。復元口径13.0cm，器高2.3cm，復元底径10.0cmである。色調は明赤褐色で胎土に1～2mmの石英粒，赤色砂，絹雲母を含む。**41**は完形で出土した皿である。口径は9.7cm，器高1.9cm，底径7.4cmを測る。底部は糸切り離しである。色調は明赤褐色で，胎土には赤色砂，石英粒，砂粒を含み，粗い。焼成もあまい。**42**は残存率1/2の皿片である。復元口径10.1cm，器高2.1cm，底径7.6cmである。色調は明赤褐色で，胎土には砂粒を多く含み，粗い。底部は糸切り離しである。**43**は1/2が残存する皿片である。底部は糸切り離しである。色調は赤褐色で，石英粒，砂粒を含む。口径は8.3cm，器高1.8cm，底径6.6cmである。

⑤土師質土器（**36**・**37**，**50**～**53**）

36は鍋片である。復元口径は30cmである。口縁部は「S」字状に外反し口唇部は内外に肥厚して突出する。口唇部内側は若干上方に，はねあがる傾向をみせる。色調は内面は明黄白色で，外面は煤によって黒褐色となる。内面の調整はヨコハケによって平滑に成形されているが，外面は凹凸が激しい。外面下半にもヨコハケがみられる。同形式の鍋はその他に細片で２点出土している。**37**は**36**に比べて外反度が弱い形式である。口縁部が「く」字形に外反する。復元口径は27.4cmである。外面は灰褐色，内面は明黄白色を呈する。胎土には微細な砂粒を含む。内面には丁寧なヨコナデが施される。**50**は防長系の足鍋の口縁部である。外面はナデ，内面は粗いヨコハケが施される。外面は淡黄灰色，内面は灰黄色で，胎土には砂粒を多く含む粗製品である。

51は**36**，**37**に比較して外反する口縁部が長い鍋である。口縁部は「く」字状に外反する。内外は黄褐色で，胎土には角閃石や砂粒，赤色砂を含む。外面は口縁部はヨコナデ，胴部はナデ調整である。内面は口縁部がヨコハケののちナデ，胴部内面はカキメ状のヨコハケが施される。

52も鍋と思われるが類例に乏しい。形態は須恵器の蓋杯の蓋受け部のような形状を呈す。外面は明灰褐色，内面は明黄白色である。胎土には砂粒を含む。調整は全体に丁寧なヨコナデを施す。**53**は壺か甕の口縁部片である。胴部外面にはタタキによって調整されている。頸部内面はケズリののち細かいヨコハケが施され，その上部はカキメ状のヨコハケがみられる。内外は明黄橙色で，胎土には絹雲母，赤色砂，砂粒を含む。**51**～**53**の土師質土器は類例に乏しく所属時期など明確にできなかった。



第16図　国産土器実測図〔S＝1/3〕

(4) 土製品（45～49）

管状土錘が５点出土している。それぞれの重量と長さは，**45**が2.32g,4.2cm，**46**が7.37g,2.6cm，**47**が2.38g,3.6cm，**48**が1.57g，3.2cm，**49**が1.87g,3.0cmである。

(5) 滑石製品（54～60）

①石鍋（**54**）

復元口径24.2cm，器高11.1cm，復元底径22.0cmである。口縁下に鍔がまわる型式で，木戸編年ではIII－ａ後半からIII－ｂにあたる資料であろう。12世紀後半から13世紀代と考えられる（木戸1995）。

②蓋（**55**）

復元口径29.6cmで，残存高は4.5cmほどである（註２）。内面には細かいミガキが施される。

③当て具（**56**～**60**）

いずれも穿孔されたつまみを有するあて具である。完形のものはない。

(6) 銭貨（62）

中国北宋代の「景祐元寶」（草書体）である（註３）。

(7) 貿易陶磁・国産土器の出土量（第５表）

宇久山本遺跡より出土した陶磁器・土器の数量を破片数によって第５表に示す。時間幅をもつ包含層出土資料であることを配慮しなければならない。

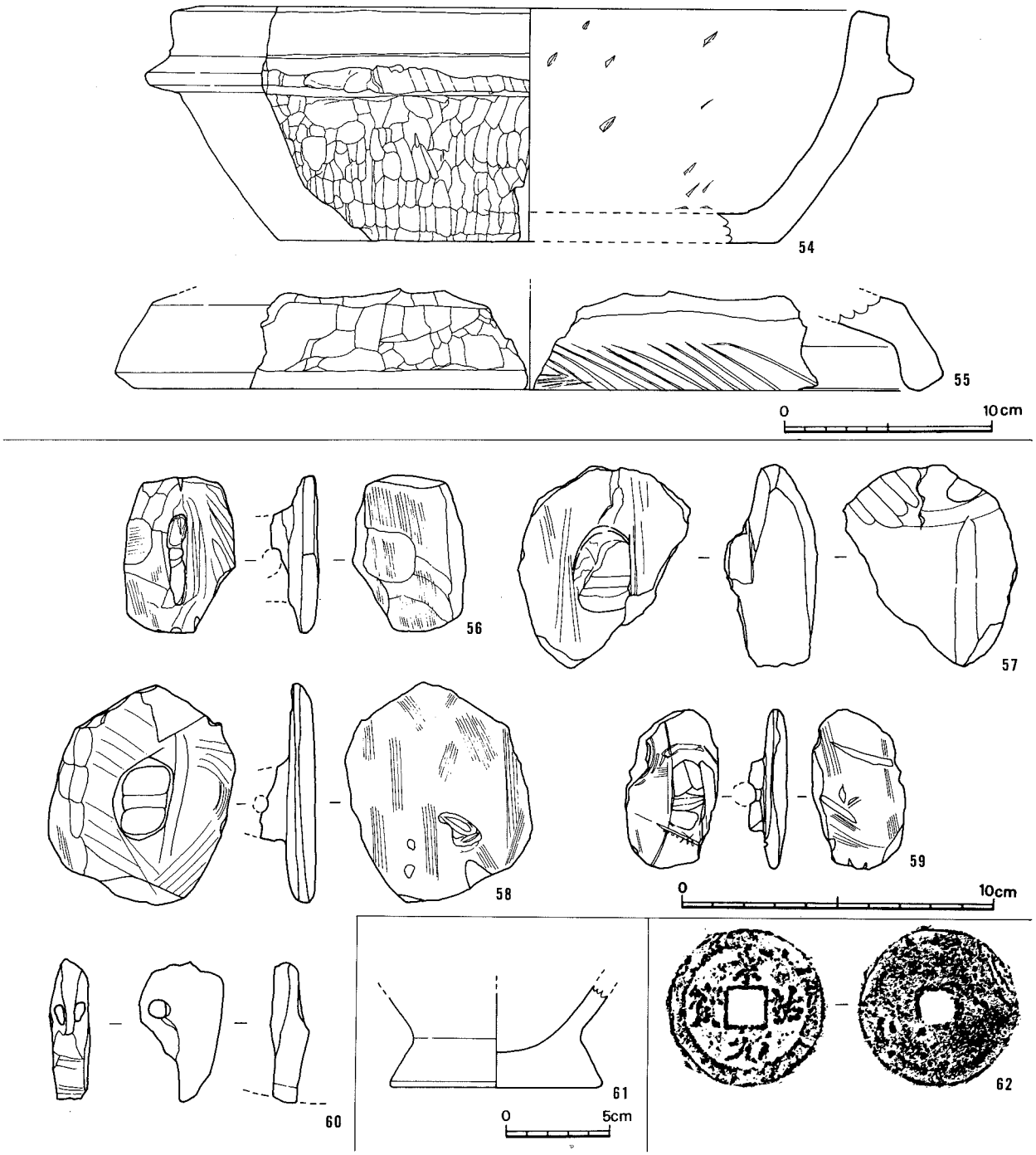
(8) 土器・石製品小結

これらの資料は包含層出土資料のため，ある程度の時間幅があると予想される。貿易陶磁のうち中国製のものは白磁碗IV類，白磁IX類，龍泉窯系青磁碗・皿，同安窯系青磁碗・皿，鎬蓮弁文青磁碗が出土し，12世紀から13世紀にひとつの盛期があると考えられる。東播系須恵器や石鍋の年代観とも整合する。これをＩ期とする。II期は15世紀後半から16世紀前半の明青花が出土したことから，この期間を中心とした前後に想定できる。備前焼の年代とも整合する。以下，Ｉ期，II期に分けてまとめ，小結としたい。

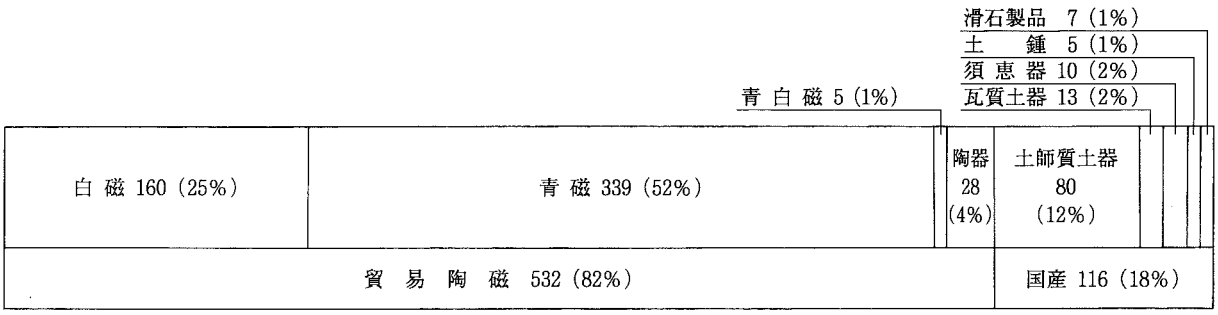
①宇久山本Ｉ期

土師器杯および皿は搬入系,在地系ともにＩ期に比定される資料と思われるが,在地系のものは13世紀後半を中心とするようである(田島1995)。**第16図36**の鍋は，口縁部がＳ字状をなし，中世博多遺跡SK-741より類似したものが出土している(山口ほか1991)。博多遺跡のものは口縁端部が水平化しており，本遺跡の鍋が古い形式のものかもしれない。博多遺跡のSK-741は13世紀代とされる。したがって本遺跡の鍋もＩ期に属すと考える。**第16図37**の鍋も胎土・成形技法が**36**と類似するためＩ期と考える。

瓦質の釜については，菅原正明氏が「筑前型」の釜としたものに類似する（菅原1989）。この形式の釜は，豊後地方や瀬戸内地域に中心があるようで，13世紀から14世紀前半にかけての資料のようである。したがって本遺跡の瓦質釜もＩ期に属すと考えておく。



第17図　縄文土器・石製品・銭貨実測図〔54, 55, 61－S＝1/3　56～66－S＝1/2　62－S＝1/1〕

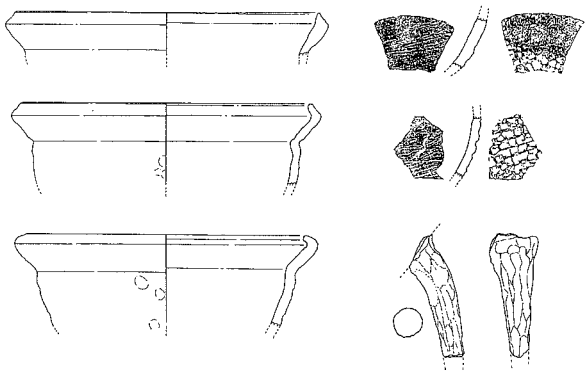


第5表　土器・陶磁器組成グラフ

②宇久山本II期

第16図50の防長系の土師質土器の足鍋片の出土が注目される。本遺跡がある宇久島では，先年宇久松原遺跡において瓦質の防長系足鍋が出土し，注目された（本田1996）（**第18図**）。報告者によると15世紀から16世紀にかけての時期とされ，本遺跡におけるII期に該当する。**50**は口縁部の形態から宇久松原遺跡出土資料と同型式と考えられ，岩崎編年のIV期に該当すると思われる（岩崎1988）。

粉青沙器もこのII期に属する資料であろう。



第18図　宇久松原遺跡出土遺物実測図〔S＝1/6〕

③宇久山本遺跡出土中世土器の位置づけ

次に本遺跡出土の中世土器の位置づけであるが，本県の島嶼部において中世土器，とくに国産の煮沸形態の土器資料が出土したことに第１の意義を見いだしておきたい。五島列島における貿易陶磁以外の中世土器の出土は調査例が少ないため稀少である。

島嶼部の中世の国産土器については，海を介した物資の流れが考えられるため，県本土部とは異なった土器の様相が考えられる。今後の研究課題である。

また，日宋貿易や日明貿易の中継地としての五島列島の歴史的役割を考慮した場合，本遺跡の遺物はI期において宇久氏（近世五島家の祖）の動向，II期において大内氏の影響などが反映しているとも考えられる。

文献史学の方面では，古代・中世の五島列島において新たな成果が得られてきているが（藤田1995）（註４），考古学からその成果をトレースすることは，現状ではできていない。今後，貿易陶磁とともに，本県島嶼部の国産土器の分析も不可欠であると考える。

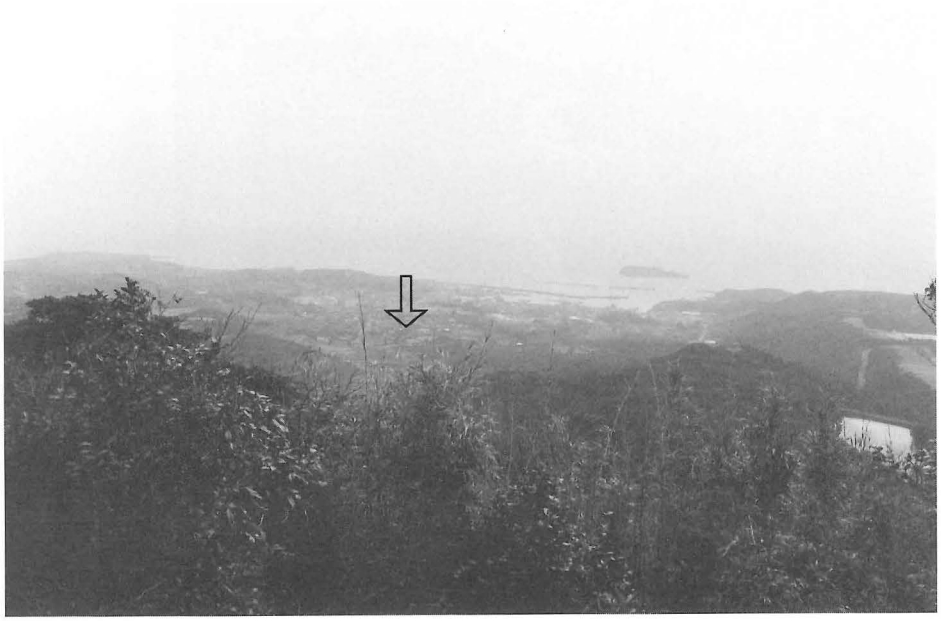
［註］

註１　貿易陶磁の型式分類は山本信夫氏らによる大宰府編年によった。
註２　長崎県立美術博物館の下川達彌次長より経筒の蓋の可能性があるとのご教示をえた。
註３　下関市立大学の櫻木晋一先生よりご教示いただいた。景祐元寶の初鋳は北宋1034年。
註４　藤田明良氏は中世の五島列島について①貿易船の寄港地・造船地としての役割②貿易品（真珠，香薬としてのキノコ類，アワビなどの海産物）の調達地としての役割③国家管理の外にあり，舟山列島・済州島などの島嶼を結ぶ小型交易船の活動地としての役割などを想定している。

［引用・参考文献］

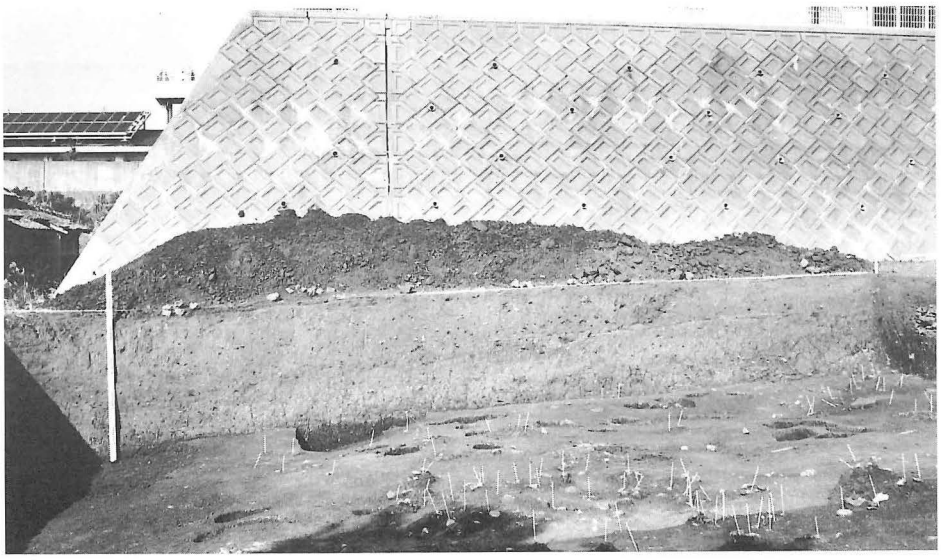
伊藤　晃　1995「備前」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社
岩崎仁志　1988「防長地域の足鍋について」『山口考古』第17号　山口考古学会
荻野繁春　1990「『財産目録』に顔を出さない焼物」『国立歴史民俗博物館研究報告　第25集』国立歴史民俗博物館
小野正敏　1982「15～16世紀の染付碗，皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 NO2』日本貿易陶磁研究会
木戸雅寿　1995「石鍋」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社
菅原正明　1989「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告第19集』国立歴史民俗博物館
田島龍太編　1995『湊松本遺跡(2)』（唐津市埋蔵文化財調査報告書第62集）唐津市教育委員会
徳永貞紹　1990「肥前における中世後期の在地土器」『中近世土器の基礎研究VI』日本中世土器研究会
藤田明良　1996「中世東アジアの島嶼観と海域交流」『新しい歴史像のために』222号
本田秀樹　1996「宇久松原遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書IV』（長崎県文化財調査報告書第130集）長崎県教育委員会
森本朝子　1997「出土遺物の分類」『博多60―第１次，４次，８次調査報告』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第543集）東長密寺建設地内遺跡調査会　冷泉町遺跡調査会　福岡市教育委員会
山口譲治ほか編　1991『博多16―博多遺跡群代37次調査報告―』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第244集）福岡市教育委員会

図　　版



遺跡遠景
（城ケ岳より）

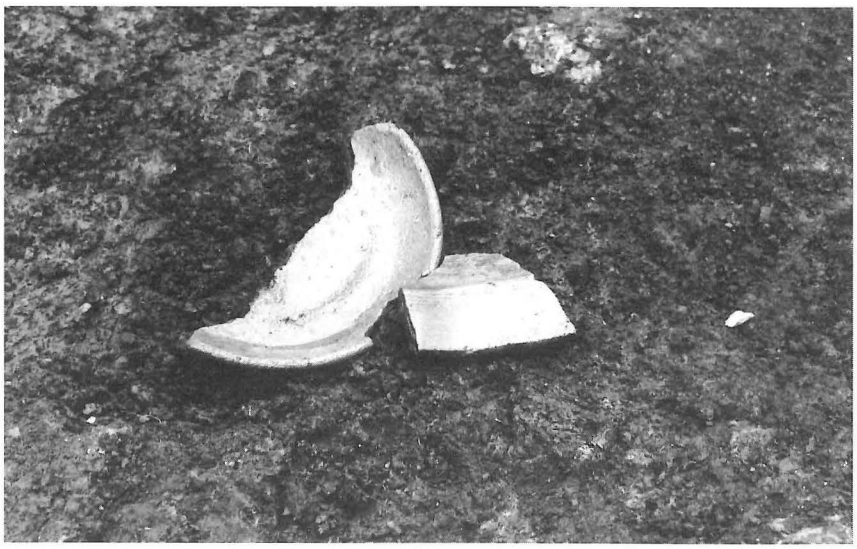
調査区近景
（西より）



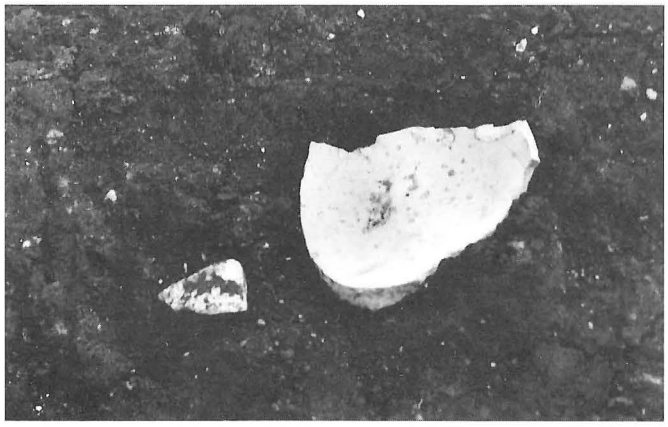
北　　壁

図版１　遺跡遠景・調査区状況

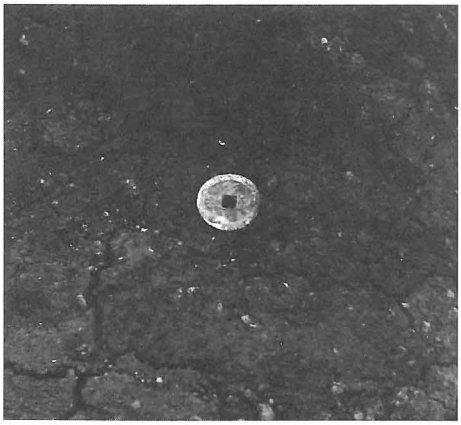
石　鍋



土師器（坏）



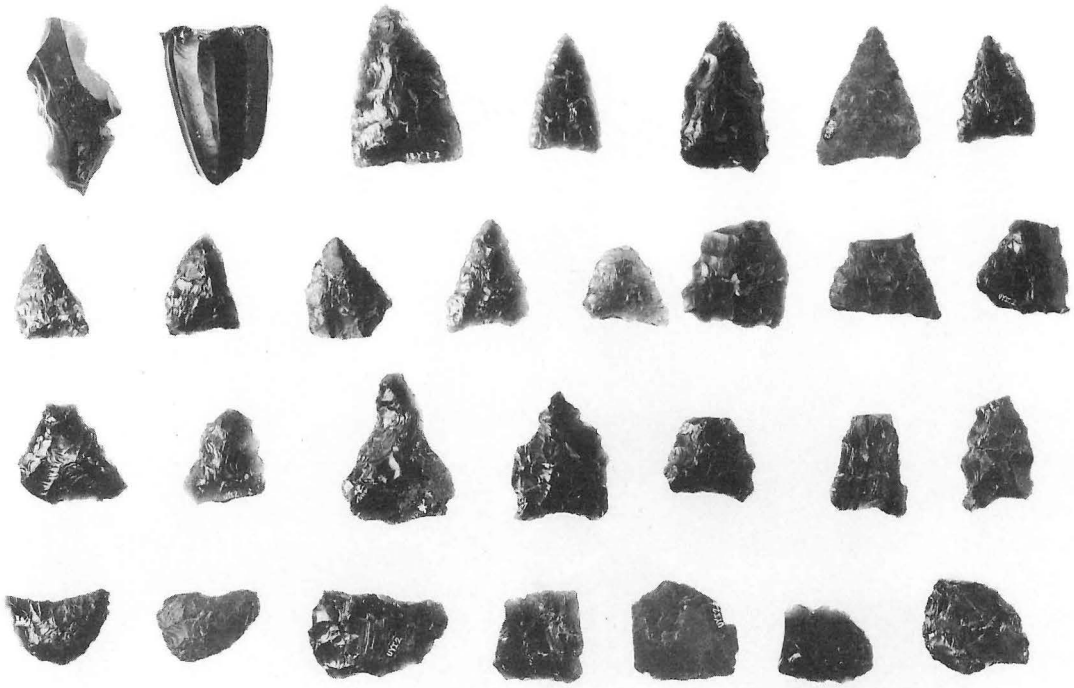
龍泉窯青磁（碗）



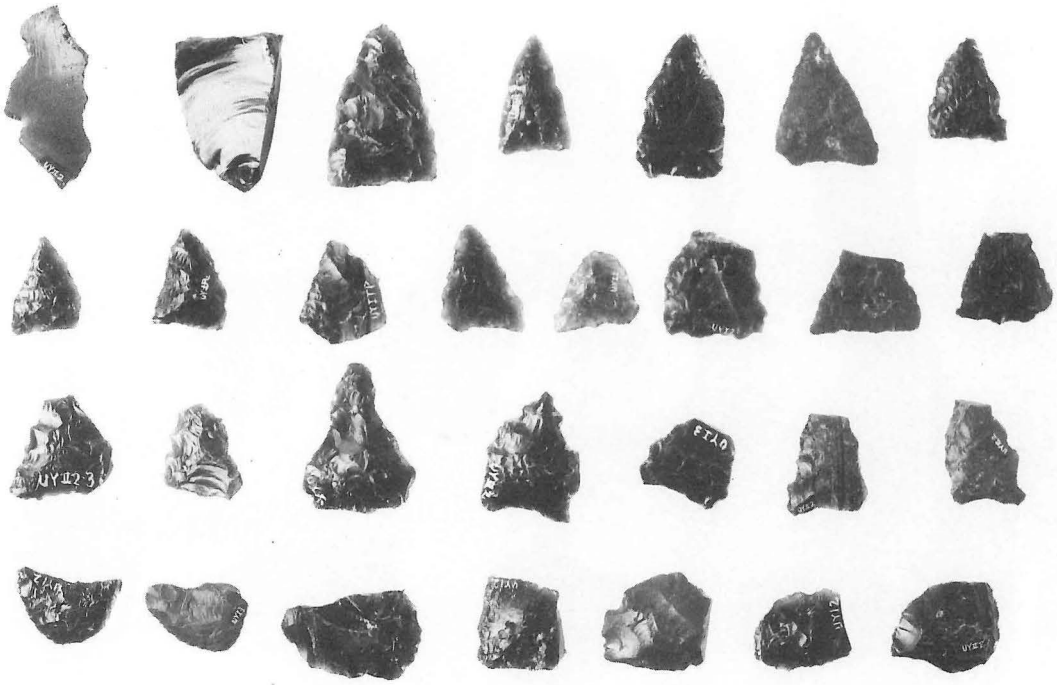
銭　貨

図版 2　遺物出土状況

表



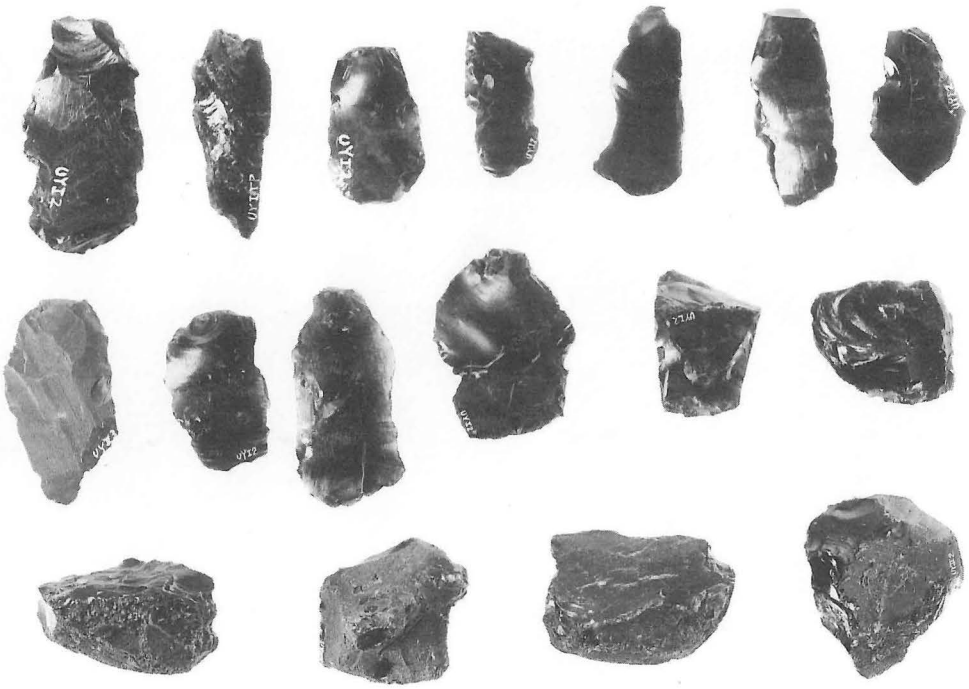
裏



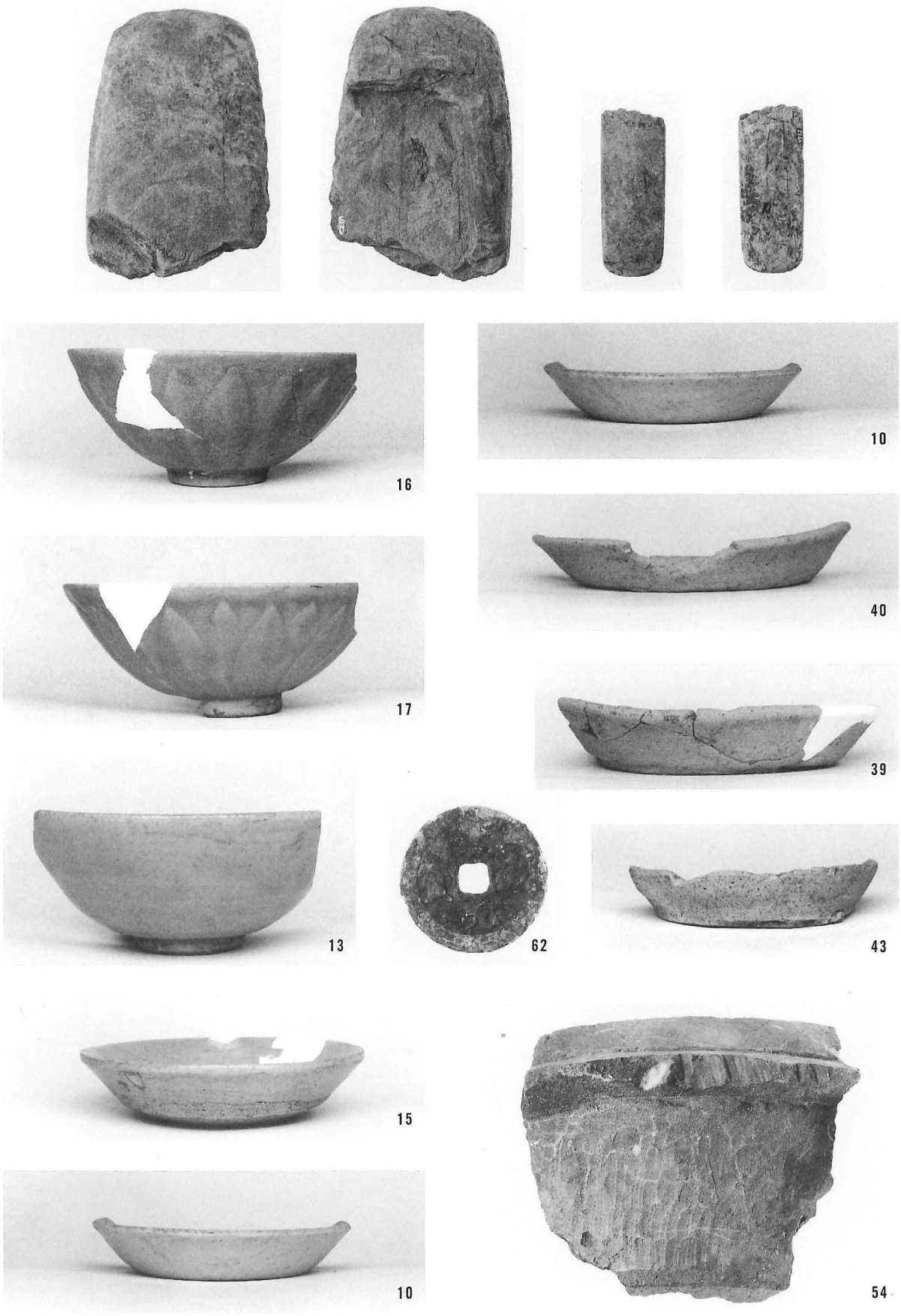
図版 3　宇久山本遺跡出土遺物①

表

裏

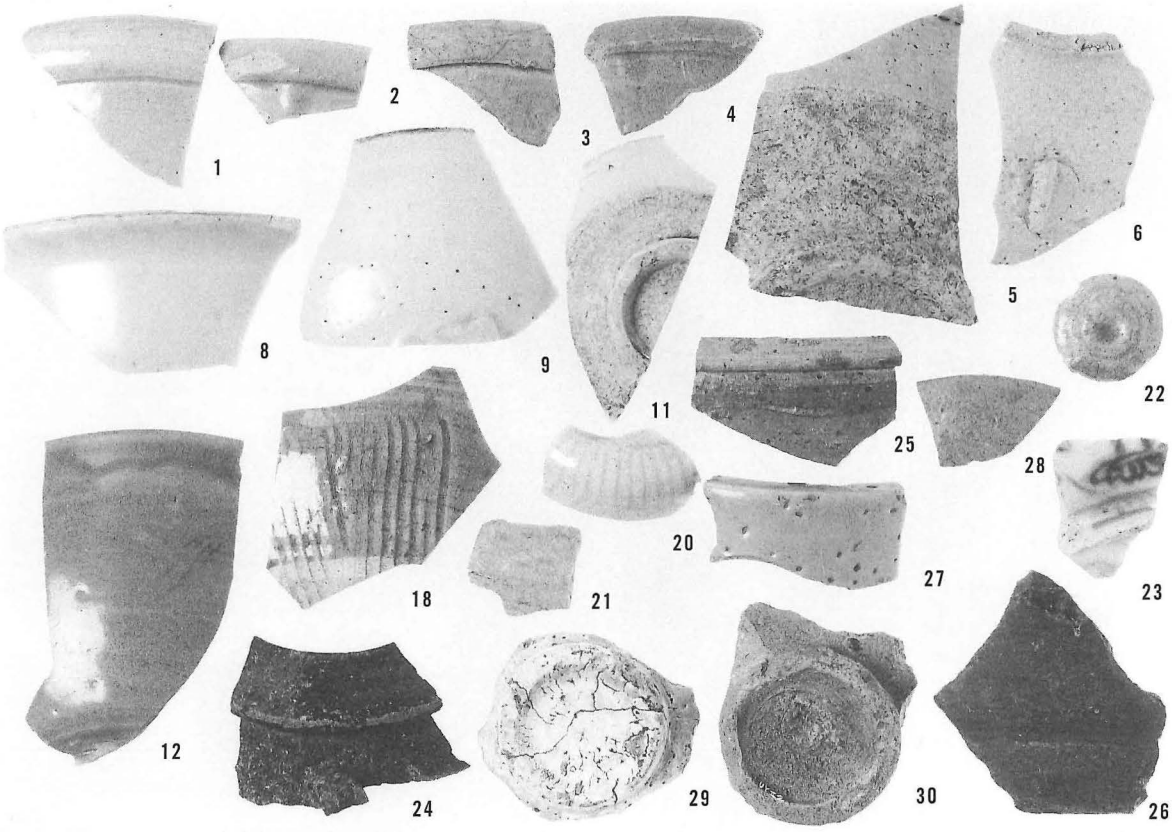


図版 4　宇久山本遺跡出土遺物②

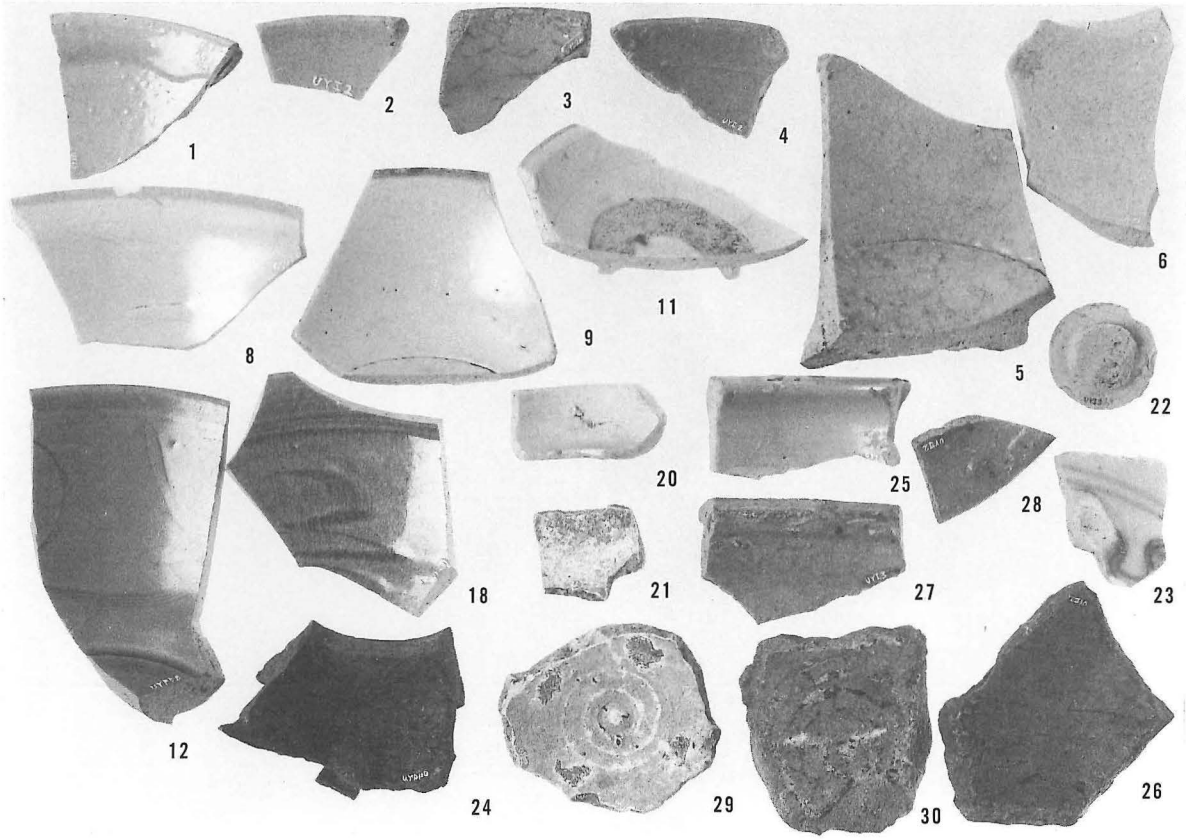


図版 5　宇久山本遺跡出土遺物③

外　面

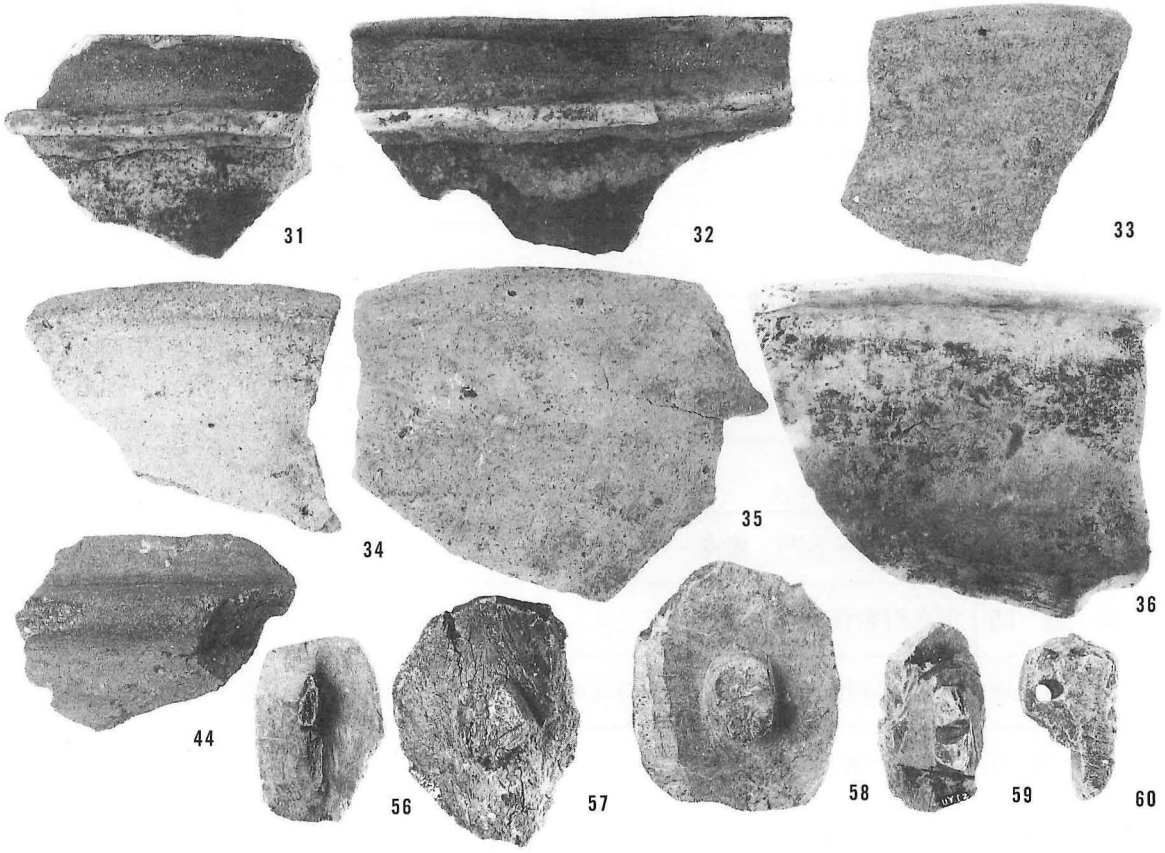


内　面

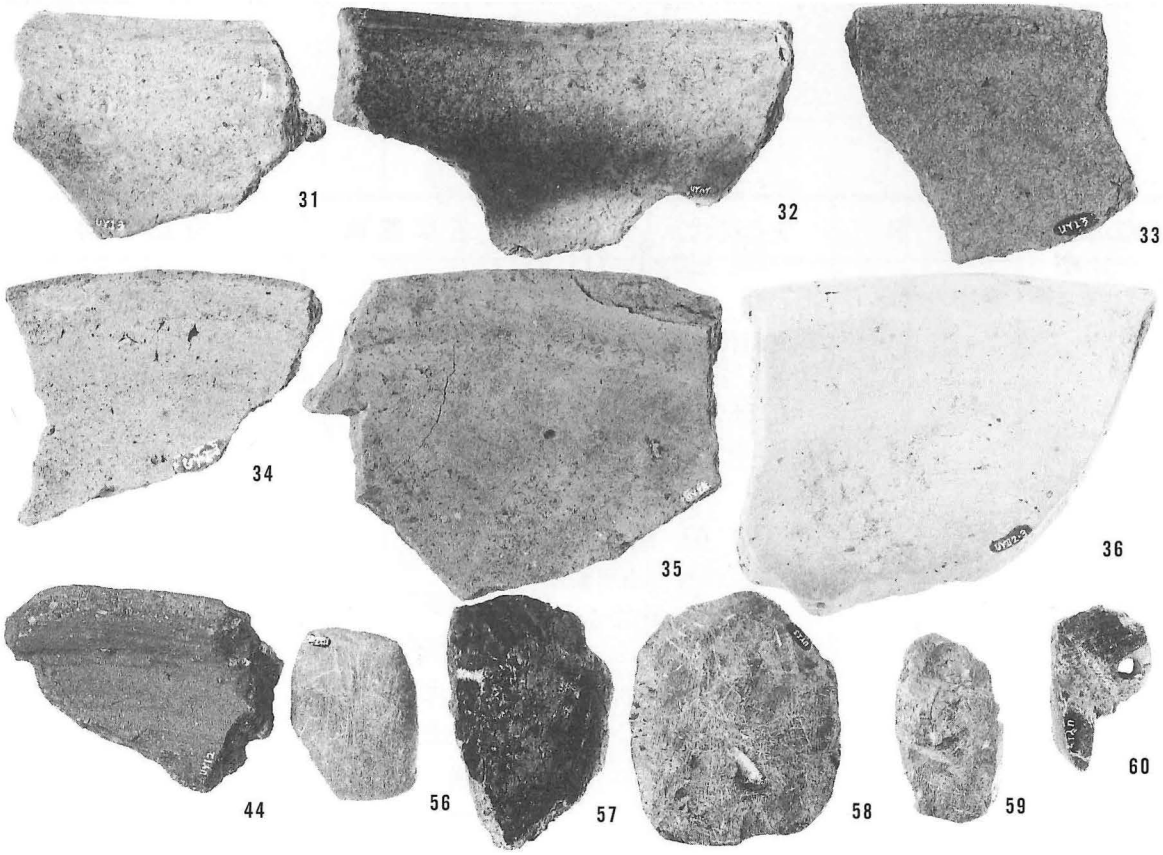


図版 6　宇久山本遺跡出土遺物④

外　面



内　面



図版 7　宇久山本遺跡出土遺物⑤

報告書抄録

ふりがな	うくやまもといせき
書名	宇久山本遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	宇久町文化財調査報告書
シリーズ番号	第3集
編著者名	川道　寛・古門　雅高・甲斐田　彰
編集機関	宇久町教育委員会
所在地	長崎県北松浦郡宇久町平郷2581番地5　TEL (0959) 57-3111
発行年月日	西暦　1997年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
宇久山本遺跡（うくやまもといせき）	長崎県（ながさきけん） 北松浦郡（きたまつうらぐん） 宇久町（うくまち） 平郷（たいらごう）	42384	024	33° 15′ 50″	129° 7′ 50″	19951211 ～ 19951221	100	保健センター建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宇久山本遺跡	遺物包含地	旧石器 縄文時代晩期 中世	柱穴遺構	角錐状石器 細石核 石鏃 サイドブレイド 磨製石斧 石ノミ 縄文土器 中国製陶磁 朝鮮製陶磁 国産土器 管状土錘 石鍋 銭貨	

宇久町文化財調査報告書第３集

宇久山本遺跡

1997年３月31日

発　行　宇久町教育委員会
長崎県北松浦郡宇久町平郷2581番地５
TEL0959-57-3111

印　刷　㈱昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007-2
TEL0957-22-6000